
きえない翼

micky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きえない翼

【Nコード】

N4201B

【作者名】

m i c k y

【あらすじ】

一通の手紙が平次のもとに届いた。それがすべての始まりだった。・。・。今までラブ物しか書かなかった私・。・。ゆっくりと時間をかけて書いて行きたいと思います。

ブローグゝ静かな足音ゝ（前書き）

ブローグゝ静かな足音ゝ

ハ ッ ト リ ヘ イ ジ ク ン

キ ミ ノ ア イ ス ル ヒ ト ヲ コ ロ シ テ
イ イ ？

今日は改方学園の卒業式。

いくら事件があってもこの日はかりはすべての依頼を断り、平次は全校生徒の前で答辞を読んでいた。

同じ級友達がすすり泣く声を背に、真っ直ぐと前を見つめ一礼し自分の席へとついた。

「平次・・・ようかまへんかったやん」

近くにいた和葉は小声で平次に話しかけるとクスクスと笑いすぐに前を向いた。

一般席からは平次の母親が2人のそんな様子を感じ無量の思いで見守っていた。

（向こうに行っても二人仲よう頑張るんやで・・・）

そんな彼らも今年から東京の大学へと進学が決まっていた。

新一や蘭のいる東京で共に未来へと羽ばたこうとしているのだ。

「服部先輩！卒業おめでとございます！」

「遠山先輩！こっちに帰ってきたら部活に顔を出しにきてくださいね！」

それぞれが思い思いの言葉を二人に投げかけては笑顔で去って行った。

校門の近くで2人を見かけた静華は

「平次。和葉ちゃん。ほんならうちは家で待っているさかい。ゆっくり皆と別れを済ませてから帰ってきいや」

二人に笑顔を向けてタクシーに乗って静華は先に帰っていった。

「俺の方は大体別れを済ませたけど、和葉はもうええんか？」

和葉は一番仲の良かったグループから少し離れて、その子達に手を振りながら平次へと近づいた。

「あたしも・・・これ以上みんなとおったら涙がいくらあっても足らんし、そろそろ帰る事にするわ」

平次の横に足早に並んでゆつくりと今まで通った道のりを歩き始めた。

「制服着て帰るのも・・・これで最後やし、なんか寂しい・・・」

和葉は少し下を向き、切なそうな顔で呟いた。

「そやな・・・。今日で最後や。いろいろあつてオモロかったなあ」

「・・・平次はほとんど学校におらんで事件ばかりやったのに・・・何が一番楽しかったん？」

平次は眉を寄せて

「何が・・・って。難しいなあ。しいて言うなら」

平次は和葉を指でさした。

「和葉がおったから・・・」

和葉の心臓が高鳴った。

「なっ！あ、あたし？」

平次は笑顔を向けて

「そうや。和葉がおったから退屈せえへんかったわ」

「？」

「からかうとすぐむきになるし、邪魔ばーかりして人の足引つ張るし、いつでもどこでも寝よるし・・・」

いままで黙って聞いていた和葉が

「もう！平次なんてしらん！」

プイっとそっぽを向いて頬を膨らませた。

そんな彼女をみて

「あんなあ和葉。オマエのそんな単純なところがええねんで。直さんと未来永劫に単純でいてな」

和葉の頭をポンポンと叩いて先に歩き出す。

「単純単純言わんというて！あたしは単純違うで清纯なんや。可憐な乙女なんや！・・・・・・ちよつと平次。無視せんというて。置いていかんで！」

彼の後を追いかける彼女。

へいへい　と言いながら彼女が自分の横に来るのを確認すると同時にまた歩き出す。

2人は公認の仲だけど、お互い意地っ張りな性格から幼馴染からはまだ抜け出せないでいた。

けれど2人はそれでも互いを必要としあつて、なくてはならない存在になっていた。

ネ ア
? イ
シ
テ
イ
ル
ヒ
ト
ハ
カ
ノ
ジ
ヨ
ダ
ヨ

ブローグゝ静かな足音ゝ（後書き）

というわけで始めてしまいました。

まだまだなんの事が分からないと思いますが、もしよろしかったら次回もよろしく願います。

第1章　赤い手紙（1）

アイシテイルヒトハ

カノジヨダヨネ？

今夜は服部家で2人の卒業祝いが行われる予定だった。

2人はそのまま服部家に直接帰ると、平次は自分の部屋に行き和葉は静華のもとへと分かれた。

平次は着慣れた学ランを壁に掛けて

「ふう……これでホンマに最後……これにも世話になったな」
学ランを着て過ごした事を少し思い返した。

「……俺はいつからこんなおセンチになったんや……ん？」
机の上に平次宛の手紙がきつちりと重ねて置かれていた。

依頼の手紙とファンレターに軽く目を通して、簡単に仕分けしながらその中の一通に手が止まった。

依頼にしては薄い厚さで、ファンレターにしては異様なほどの赤い色の封筒。

「なんやこれ？」

封筒の表にはカタカナで　ハットリヘイジ　とだけ書かれていた。
裏返すと黒い羽根のシールが逆さに貼ってあった。もちろん差出人の住所も名前も書かれてはいなかった。

封を開けようとした時、一瞬凍りつくような気配を感じ封を開けるのをためらった。

「何や今のは・・・いつたい」
そして平次は・・・封を開けた。

ハ
ッ
ト
リ
ヘ
イ
ジ

キ
ミ
ノ
アイ
ス
ル
ヒ
ト
ヲ
コ
ロ
シ
テ
イ
?

0
8
0
-
x
x
x
x
I
x
x
x
x

平次はその嘘とも真ともとれぬ手紙にしばらく体が動かなかった。
もし自分をからかう為のものならば、そのまま捨ててしまふところ
なのだが何故か胸騒ぎがしてたまらなかった。

（和葉！）

平次は自分の母親と一緒にいるであろう和葉を目で確かめるため、急いで台所に向かった。

するとそこにはまるで本当の親子のように、ご飯の支度に追われながらも楽しそうな2人の姿があった。

その姿に安心して部屋へ戻ろうとした時

「平次どないしたん？ご飯まだやで？」

その声に少しビクツとしたように平次が振り向いた。

首を傾げて顔を覗きこんできた和葉に慌てて返答した。

「あつと・・・えつ・・・ああそうか！なんやほんなら部屋で待つてるから出来たら呼びにきてくれるか？ちよつと部屋で調べもんしてるさかい」

それだけ言うつと足早に部屋に戻って行った。

「平次・・・よつぽどお腹空いてるんやな・・・よし。オバチャン！もう一品あたし作るわあ！」

大好きな人に自分のご飯を食べてもらう事を想像し、和葉は笑顔で静華のもとへとかけていった。

部屋に戻り、消印もないその手紙をもう一度見直した。

「もしかして・・・イタズラかもしれへんしなあ」

手紙を何度も表裏を確かめては封筒の中外と目に穴があくほど確かめた。

（なんもわからん。・・・あと気になるんはこの携帯番号やな）

イタズラかもしれないと掛けるを躊躇ったその瞬間だった。

平次の携帯が鳴った。

(2)

その番号は今まさに掛けようとしたその番号からだった。

1回目・・・2回目・・・コールが3回目に鳴ると同時に平次は携帯の通話ボタンを押した。

『モシモシ、テガミミタ？』

ボイスチェンジャーを使用している高く不気味な声で話しかけてきた。

「イタズラにはあんまりええ趣味ちゃうなあ……なんであんな手紙寄こしたんや？」

平次は心を落ちつかせ、冷静に相手を分析しようとしていた。

『カノジヨダヨネ？キミノアイスル
ヒトハ』

その声は問いかけに対して、反応が薄いままそう言った。

「誰の事いつとんのや？なに言うつとんのか分からんわ」
平次は机の上に飾られた写真から目を逸らし答えた。

『ナラアノコチヨウダイ』
そう言って電話が切れた。

「おい！待て・・・って・・・きれてしもった。なんやねんあの気味の悪い声は。女か男かもわからんやんけ」

平次は携帯を1度切り、再度掛けなおした。

『電波の届かないところか電源が入っていない為・・・』

「クソ！電源切られてしもったか」
眉をひそめて携帯を閉じた。

そして今度は大阪府警の大滝警部に電話した。

「もしもし大滝ハン？俺や平次やけど」

『おお平ちゃんか！卒業おめでとさん。この後で皆で家に押しかけるよって。お祝い楽しみにしといてや』

平次の父が平次が日頃お世話になっている人に声をかけて家に呼んでいるらしい。

「あんな大滝ハン。ちょっと調べてほしい事があんなんだけど。今からいう携帯番号の持ち主を探してほしいんや。ほな、言っで」

『ちょ・・・待ってや』

ゆっくりと平次がその番号を告げ、そして確認しあって電話をきった。

「平次？」

声が聞こえると同時に和葉が部屋に入ってきた。

平次は慌てて赤い封筒と手紙を隠して和葉の方へ向きなおした。

「な、なんや。もうできたんか？」

「まだやけど・・・オバチャンが後はええから平次のところで休ん

できいって言ってくれてん」

そう言くとベットの前に座り込んだ。

平次は机の椅子に座り

「邪魔やつたんちゃうか？なにしたんか言ってみいや。聞いたるさかい」

「なんもしてへん！後は煮込むものだけやから一人でええて言うてくれたんやもん」

和葉は頬を少し膨らましながらか近くにあったクッションをとって抱え込んだ。

横目で和葉を見ながら

「東京^{むい}に行つて煮物^{むい}ばかりは勘弁してや」という言葉に

「煮物ばかり・・・って。あたしは煮物しか作れんちゃうよ。一応和食ならオバチャンに小さい頃から習ってるからそれだけってことはないわ。それに・・・もしも平次に文句言われたらなんも食べさせんでええ言われてるし」

「ハハ・・・あのオバハンはホンマに」

和葉は立ち上がった窓際に行った。

「桜・・・。今年は遅いなあ。京都の桜も綺麗やけど平次の家の桜には思い出がいっぱいあるから、あたしは服部家の桜が一番好きやわ。今年は見れんまま東京に行く事になりそうやし・・・残念やわ」平次も立ち上がり窓際に立った。

「和葉はうちの桜が好きやったんか・・・知らなかったわ」

2人はまだ蕾の、だけど今にも咲き出しそうな桜をしばらく眺めていた。

ハ
ヤ
ク
ア
ノ
コ
チ
ヨ
ウ
ダ
イ

(3)

ハヤクアノコチヨウダイヨ

夜になり服部家には沢山の人が押しかけてきていた。

みんな平次と和葉の思い出話に花をさかし、2人は居心地が悪かった。

平次はちょうど和葉の話になった時ここぞとばかりに席をたった。

「そや、大滝ハンに見せたいもんがあつてん。ちよつと俺の部屋まで来てくれへんか」

大滝を手招きして2階の方へ指をさした。

大滝は思い出したように

「そういえばお祝いもつてきたんやつた。ほなちよつと平次ハンの部屋に行つてきますんで・・・」

みんなは2人が居なくなつた事にも気がつかないくらい酒を飲んでいて、酒が飲めない人たちはその人たちからまれてと席を立つた事など気にもとめなかった。

「で・・・携帯の持ち主分かったんか？」

部屋に入るなり大滝に聞いた。

「あれは盗難届けが出てる携帯やったで」

平次は多分そうであろうと思っていた為かあっさりとしていた。

「そうか・・・」

そう言うとベットに座った。

大滝はまた平次が事件絡みで悩んでいるんだろうと

「大変なんか？平ちゃんの追ってる事件は・・・できる事なら協力したるからいつでもいいや。あっ！そうや・・・これお祝いや」

平次は小さい箱を渡された。

「おおきに。開けてええか？」

箱を開けると平次は驚いた。

「バイクの・・・GPS！これメツチャ高いやつやん。こんなもたらえんって！」

「ええって。平ちゃんが大阪府警に入ってきた時に倍にして返してもらっさかい」

大滝は平次が前から欲しがっていた事を聞いていた。

「倍はきつついなあ・・・でもホンマに嬉しい。へえ・・・なんやなんて書いてあるんや？」

楽しそうに説明書を読む平次は大滝はまだ18歳の男の子なんだと改めて思った。

いつも事件の時に真相を究明しては、大人でも辛い事に堂々と立ち向かい自分の考えを相手に伝える事ができる。そんな平次に少年として出きるだけ接していこうと心がけていた。大滝はあの事件の時にそう強く思ったのだ。

誰よりも平次と親しくしていた人間がおこしたあの事件。

「坂田・・・来週な」

平次は説明書をみながら

「知ってる・・・死刑決まったって親父から聞いた・・・人を殺してもうたんや。どんなに悪い奴の命でもそれを人が奪ったらあかん。・・・坂田ハンの命かて同じや。人が人を裁く世の中やいうても・・・死刑なんて俺は思ってしまうし、いくら法やからって人が人を裁き殺す事が当然やとは思いうない」

平次は淡々と言いながらも、行き場のない憤りを心の奥に隠していた。

「平ちゃん・・・」

大滝は平次の横顔をみて見え隠れする気持ちを切なく感じた。

平次は初めて自分の身近な知り合いが犯罪者となり、死刑とされてから命の重みをヒシヒシと感じていた。

勿論、命は大切だと親からも教えられてきたが、坂田の事件をきっかけに命について改めて考えさせられたのだ。

命ってなんだ？

人が人を裁く時・・・命が一つこの世から消えていく。

坂田は自らその裁きを重んじて受け、いままさにこの世とあの世の間にいる。どんな思いで一日一日を過ごしているのだろう。

平次は坂田には会いに行かなかった。

目の前にしてきつと何も言えず、そして彼の手が汚れていく事を止められなかった事を悔やむだけだからだ。

そんな気持ちも大滝には十分分かっていた。

平次のポケットに入っていた携帯が鳴った。

着信番号がさっきのと同じだとわかると、平次はすぐに電話にでた。

『ヘイジクン　ア・・コノ・・・　チハ
』

聞き取りづらいノイズに混じり、同じ声で話しかけてくる。

「はあ？よう聞こえんけどオマエどこにおんねん！」
イタズラとも本気とも思えないこの声に苛立ちを感じた。

『アト・・・ニチ？』
そしてまた一方的にきられてしまった。

「なんやねん。一体・・・」

平次のただならぬ感じに大滝は嫌な予感がした。

「誰から電話やったんや？」

平次は黙って立ち上がり、机の中から黒い封筒と一枚の手紙を取り出し大滝に差し出した。

「見てもええんか？」

大滝は平次が頷いた事を確認し手紙を開いた。

「・・・・・・な、なんやこの手紙。イタズラちゃうんか？このアイスルヒトって・・・・まさか！」

「まだ本当にソイツが本気なんかイタズラかは分からんねん。そやから和葉にはなんも言うてない」

「そやけど平ちゃん。一応言うておいたほうが」

「まだ分からんやろ？・・・・・・いらん心配はさせとぅないねん」
そう言うとき平次は窓際に行つて外の桜の木をみた。

「ん？」

「どないしたんや平ちゃん？」

平次は大滝に貰つた物を机の上に置いて

「俺ちよつと下に行つてくるわ。これ大切に使用せしてもらつからホンマおおきにな」

そういうとき下の方へと降りていった。

月明かりに照らされた服部家の庭。

風は少し冷たく、静かに吹いては桜の木を揺らしていた。

「なにしとんねん」

平次は和葉に近づいて声をかけた。

「平次・・・どこに行つてたん？」

桜の木の根元で和葉が座つた状態で平次を見上げた。

「大滝ハンに俺の部屋でお祝いをもらうてん。こんなところだったら風邪ひくで」

和葉の前に立ち、桜の枝が揺れる夜空を見上げた。

「なんか桜の木に優しく見守られてるようで・・・こんなただの木やのになんでやる？・・・とっても温かいねん」

和葉も空を見上げた。

「桜・・・あたしらが行く前に咲いてくれんやるか」

「そうやな・・・」

和葉は儚げな笑顔を浮かべてこう言った。

「来年は見られへんかもしれんし・・・」

「アホ。咲いたらすぐに帰ってきたらええんや。東京と大阪なんてすぐなんやで。和葉はなんも知らんやろうけど」

平次は和葉のすぐ横に座り木にもたれ掛かった。

「・・・しつとるもん。そしたら平次一緒に帰ってくれるん？」

「・・・約束つてあんま好きやないけど、まあ・・・ええか」

和葉が平次にそつと寄りかかった。

「来年は・・・平次と一緒に帰る・・・約束・・・」

いつの間にか平次の肩で寝息をたてる和葉をそつと抱きかかえて客間へと連れて行った。

愛しく・・・かけがえのない人。

お互い離れる事ができずに一緒に東京に行く事にした時。

未来はずっと続くと幸せに思ったあの瞬間。

必ず幸せにするんだと心に決めた二人。

ゆっくりと静かにそして不気味な音をたてた・・・運命の輪が廻り始める。

(3) (後書き)

と、いう訳でやっと話が進むといった感じです。

なんのこっちゃ？という方も多々あると思います。

でも話しは進めさせていただきます（申し訳ないですが私の実力ではこれが精一杯です・・・）

次回は来週の月曜日に更新する予定です。

何の事が分からない・意味不明なこの話の続きに、これからもお付き合いただけたら幸いです。

第2章 見えない影 (1) (前書き)

さてここで注意です。

ここから本題に入っていくのですが、それにあたってオリキャラができません。それがどうしても嫌だ！という方は本当に申し訳ございません。とつても残念で寂しいですがここでお別れです。

それでも大丈夫よという方。

あまり複雑なものは私は嫌いですし、そんなん書けません。ですのでオリキャラは現段階では3名しか登場しません(私の精一杯です)

それ位なら・・・しょうがねえ読んでやるかという方。

本当に感謝します。

どうぞどうぞお読みになって下さい。

では・・・後ほど。

第2章 見えな影 (1)

その奇妙な手紙が届いてから3日がたった。

何事もなく時が過ぎて、平次は思い違いかもとさえ思い始めていた。大滝も一応何人か和葉の身边に配置させていたが怪しい人物は見当たらなかった。

「イタズラやったんやろか？」

平次は事件を片付けたあとに大滝を捕まえて近くのベンチに座りコーヒーを飲んでいた。

「それならえんやけどな。とり合えず明日もう一日うちの若いやつらを和葉ちゃんにつけるようにしとくから、平ちゃんもいらん心配せんで自分の事を考えなアカンで」

そう言つて平次から貰ったコーヒーを一口飲んだ。

明日から平次はどうしても東京に行かなければならない用事があった。

本当ならば昨日から行かなければならなかったのだが、やはり和葉の事がどうしても気がかりで大阪にとどまっていた。

「明後日すぐに東京から帰ってくるよつて………それまで和葉の事頼んでええか？」

大滝は大きく頷いて平次をみた。

「平ちゃんは……ホンマ昔から見掛けによらず心配性やなあ。あんまり深く考えすぎると早くにハゲるで」

「大滝ハン。人の心配する前に自分の心配しいや。ほな俺行くわ」
平次は近くにあったゴミ箱に缶を投げ捨てそのまま去っていった。

平次が見えなくなると大滝は自分の頭に手をやり

「まだ……大丈夫……やろ」

そう呟いてコーヒーを一気に飲み干した。

この後、平次は和葉と買い物にいく約束をしていた。
梅田駅の改札口に14時。
あの手紙が着いてからは念のために街中や人混みは出来るだけ避けていた。

突然買い物に行きたいと和葉が言いだしたのは手紙が着た次の日の事だった。

近くを散歩したり、バイクでツーリングに行ったり誤魔化してはきたものの

「冬物のセール明後日までやし……一緒に行くのが嫌なら友達と行くから」

などという始末で、平次は悩んだすえに今日にしてもらったのだ。もし明日東京に行っている間に一人で買い物にいき　もしも　という事もある。

「そんなかわり俺が東京に行ってる一日は絶対家から出るなよ。絶対にや！」

そんな約束をさせられ、意味が分からないながらも和葉はしぶしぶ承諾した。

24時間一緒にいれる訳ではない。

平次が大阪にいるのもあとわずか。

以前から依頼を受けていたものはキャンセルをするわけにはいいかない。

できるだけの依頼を片付けておきたいというのもあるが、何よりもすぐる思いで依頼してきた人に今日はダメになったなどと簡単に断る事はどうしてもできなかった。

大滝はその事も考慮して和葉の護衛を用意してくれていた。

平次がいない時は大滝が用意した刑事が、平次が戻ってくれば若い刑事達はまたそれぞれの仕事に戻るといふ事がここ数日繰り返されていた。

和葉の護衛をしている若い刑事は2人。

一人は澤田 諒（さわだ りょう）。

もう一人は町井 宗政（まちい むねまさ）。

2人とも去年の4月に配属された正真正銘の若手なのだ。

平次はなんだか現場で2人を見たことがあったが、今回の事でお世話になっている事や歳も近いということもあり今ではかなり話をするようになった。

この3日間そのような感じで和葉の身边を3人で見守ってきた。

「少し遅刻やな。・・・急がな」

平次は腕時計で時間を確認すると走り出した。

さつき澤田刑事から

「待たせ過ぎですよ。はよう来てやって下さい。和葉さん可哀想やないですか！」

と言う心配なのか苦情なのか分からない連絡を受けていた。

するとその数分後には町井から

「なんだかやけに男共が話かけてきます。和葉さんがかなり困つてますね。僕らが行く訳にいかないんで早く来て下さい」

見張ってくれている事には感謝してるが、時々こういう連絡まで入れてくる2人。

平次はその報告を受け不機嫌気味に携帯を持つ手に大声で怒鳴った。

「もうちょつとでつくから、しつかりと見張つててや！」

どうやら不審者に気をつけてくれという意味と、男達を一切近付けるなという意味が含まれているらしい。

町井は澤田に平次から言われた事をそのまま伝えた。

「そんなん言われてもなあ… あっ… また男が話かけてきた」

2人は顔を見合わせてどうしよかと悩んだ。

「大滝警部には和葉さんに気付かれないように見張られてるしなあ。」

すると澤田が

「・・・よし。俺少し近くに行つて話かけてきそうな男を片っ端から追つ払ってくるわ。ここからやと威嚇もできへんし」

そんな澤田の言葉に少し考えてから町井も そうだな と了解した
「絶対気付かれないようにしろよ」

小声で心配そうに澤田を見送った。

その返事に両手で小さく丸と表し、和葉の側へと歩み寄った。

和葉は待ち合わせ場所で平次が来るの待っていた。

改札口を通る人々は平日という事や時間帯のせいもあるが少ないような感じがした。

時計を見ると30分が過ぎている。

「まだ30分しか経ってへんやん」

待ち慣れしてしまった和葉は通り過ぎる人を、まるで映像を見てるかのようにただ眺めていた。

流れいく人々の中で、髪が長く背がやや高い女性と目を合った。

（綺麗で黒く長い髪・・・まるで蘭ちゃんみたいな人やな）

するとその女性は和葉に近づいてきた。

（ア、アカン。思わず見惚れて思いつきり見てたわ。なんか言われるんやるか）

内心ビクビクしながらその女性からゆっくりと目を逸らした。

女性は近くまで来ると一瞬止まって、そして和葉のすぐ後ろにあるゴミ箱に何かを捨ててそのまま去って行った。

（ビククリしたあ・・・）

後ろを振り向くともうそこには姿はなかった。

その時和葉が立っている所から少し離れた公衆電話が鳴った。
「ん？」

和葉も澤田もその公衆電話に視線を移した。
誰も気がつかないのか、それとも無視して通り過ぎているのかその電話の前で立ち止まる人は誰もいない。

和葉は首を傾げてゆっくりと公衆電話へと近づく。
（なんでずつと鳴ってるんやろ。間違えてるんやるか？）
そしてその鳴り止まない電話の受話器に触れようとした。

その瞬間、改札口から激しい爆発音が聞こえた！

人々の叫び声が辺りに響き渡り、外へと逃げまとう波に和葉は押さ

れていった。

町井はすぐに皆を避難誘導するため飛び出した。

「落ち着いて下さい！落ち着いて出口へと歩いて下さい！走らないで！」

その声はパニックになつてゐる人々には聞こえてはいなかった。

みんな必死で出口へと向かつていき、倒れる人には目もくれず我先にと外を目指した。

澤田は町井のもとへかけより

「なんや一体！とり合えず府警に連絡や！俺は和葉さんを探してくる！」

「ああ頼んだ！詳しい連絡は僕が入れとくから早く！」

2人がその場で別れようとした時、もう一人の男の声がした。

「和葉の事はええから2人は人命救助にあたってくれ！倒れてる人やパニックになつてゐる人をこっちに向かつてくる際に仰山みかけたし、さっきの爆発音を聞いて近くの警察もきてたようやから人手は足りるやろ。俺は急いで和葉を捜していくよってここは頼んだで！」
それだけ言つと平次は人の波の中へと消えて行つた。

第2章〈見えない影〉（1）（後書き）

〈見えない影〉に入りまして前書きにもありましたオリキャラがでて来ました。

あまり深く紹介すると後で大変になりますので（私が）簡単に・・・。

澤田・・・大阪府出身。身長172cm。体重57kg。

町井・・・東京都出身。身長168cm。体重56kg。

一体こういう時ってどこまで紹介すればいいのかわかりません。おいおい本文で・・・ということになるでしょうか・・・。

次回もう一人のオリキャラ登場です。

(2) (前書き)

続きになります。

今回で前回言ったオリキャラは全員でることができました(ホッ)
後は犯人の目星と動機ですね。動機というのはほとんど最後にならなければ分らないのでね。

まあ・・・ぼちぼちと・・・。

では・・・

(2)

「和葉！どこや！」

人々の悲鳴にかき消される平次の声。

周りを見渡すが和葉の姿はどこにもない。

平次は1度出口まで行き、何台もある救急車の中や簡易救護所で似てる人に声を掛けては焦りが募っていった。

「まさか、まだ中におるんか・・・」

もう一度来た道を探そうと思い振り返った。

そして・・・その場に立ち尽くしてしまった。

赤ん坊を必死で抱えて外へと走る母親。

額から血を流しながら必死の形相で出口を探すサラリーマンの男性。

倒れた老人は端へと追いやられ、誰も目に留めず我先にと走り去っていく。

まるで地獄の入り口から助けを求めて逃げ待とう人達の姿に一瞬思考が止まったように足が動かなかった。

「なんやねん・・・これ・・・」

その光景に怒りと恐怖が平次の瞳に宿る。

和葉の顔が一瞬横切り、平次はその場から一歩ずつ動き始めた。

（和葉・・・和葉・・・和葉！）
そして無我夢中で人々の流れに逆らって走り出した。

（オマエにもしもの事があつたら・・・俺は）
「くそお！」
自分の大腿を拳で思い切り殴った。

その時だった。

狂乱する人達の叫び声の中からかすかに聞こえた聞き覚えのある声。
「へ・・・い・・・じ・・・」
流れる人に押されながら声が聞こえた場所で、耳に全精神を集中させる。

「平次・・・平次」
ふっと左を見ると人の流れの隙間から見慣れたリボンがそこにはあった。

少し離れた柱の影に・・・和葉が小さくうずくまっていた。

「和葉！」

慌てて人の波を無理やり横切って駆け寄る。
和葉にもその声が届き、顔を上げて平次の姿を探した。
「平次！」

平次の顔を見たときに安心してような笑顔が向けられた。
それと同時に和葉が右足を押さえているのが目に入ってきた。

「怪我・・・したんか？」

和葉は小さく頷いた。

どうやら逃げ惑う人たちに巻き込まれ足をくじいてしまったらしい。
見た感じ大きな怪我はなさそうだった。

平次はホッとして

「今、救護所の方へ連れていったる」

和葉を抱きかかえようとした。

「アカン！ちよつと待って！」

「？」

和葉が柱の影に隠れるように守っていたもの。

そこには長い黒髪の女性が胸を押さえて、体をくの字にして倒れていた。

その女性は苦しそうに息をしながら

「うちの事は・・・かまわ・・・んで行って下さい。そのうち・・・
助けも来ると・・・思いますから・・・ほんまに・・・ありがとう」
時々嗚咽のような声がもれる。

（顔色も悪いな・・・一刻も早く病院に連れていかなアカン）

その時平次の後ろのほうで澤田の声が聞こえた。

「平次さ〜ん！こっちは人手も足りてきたんで和葉さんを一緒に探
しますよ〜！」

平次は澤田を呼んで倒れている女性をみせた。

澤田はその女性の左手を持ち急いで脈をとり、「大丈夫か？」と顔を覗きこんだ。

女性は澤田の顔をみて何か言おうとしたが、息苦しくて声にならないうだった。

「しゃべらんでええから……今急いで救急隊呼びます！平次さんは和葉さんを連れて出口すぐそばの救護所で手当てを受けて下さい！」

そう言うのと慌てて携帯を取り出して空いている救急隊を確認しはじめた。

「そうやな。またなにかあるかもしれへんし、和葉だけでも先に出口に連れていつてくるわ。すぐに戻ってくるよって、それまでこの女の人頼んだで！」

澤田は携帯で会話しながら頷いた。

平次は女性に近寄り

「アンタ、もうちょっとで救急隊がくるよって頑張るんやで！」

「あ……りが……。とう……。うちの名前は……。青乃主……。玲^{レネ}祢……。名前……。聞いても……。いいかな……。？」

平次は軽く頷いて

「俺は服部平次……。こいつは和葉や……」

玲祢は2人をみると頷いて

「そう……。そばにいて……。くれて……。ありが……。とう」

そう言うとすぐに苦痛の表情を浮かべて丸まった。

「救急隊どのくらいでくるんや！」

「いまこっちに向かってくれるそうです。大丈夫です。すぐにきます！」

いつまでも和葉をここには置いておくわけにはいかず、平次は和葉を抱きかかえて出口へと歩き出した。

「アタシ歩けるから大丈夫や！降ろしてって！平次！」

「うるさい！ちつとでええからだまっとけ。俺がどれだけ心配したとおもっとんねん・・・ほんま」

「平次・・・」

和葉は自分をおもって必死で探してくれた平次の気持ち嬉しかった。

そして和葉はチラッと後ろを向いた時、澤田が女性に話しかけているのが見えた。

「あの人・・・玲祢さん・・・大丈夫やろか・・・」

平次に抱えられた腕の中で心配しながら和葉は首にギュツとしがみついた。

「大丈夫やって。澤田ハンも町井ハンもあれでしっかりしてるさかい」

平次の聞きなれない人の名前に和葉は

「あの刑事さんといつから仲がいいん？」

鋭い指摘に思わず

「前に・・・事件現場で一緒に捜査してから・・・やったかな？」

平次は斜め上をみて和葉から目をそらした。

「ふん。そうなんや・・・。それにしてもビックリしたわ。アタシのホンマに近くで爆発があつたんやで・・・もうちょっとで大怪我するところやったわ」

和葉は明るく平次にそう言った。

しかし平次からは返事もなく、急に立ち止まってしまった。

「どないしたん？平次・・・なんかあつたん？」

平次の額から冷たい汗が流れ落ちる。

もしもこの爆破が和葉を狙ったものだとしたら？

「和葉……ずっと待ち合わせの場所におったんか？」

全身に鳴り響く鼓動。

「近くの公衆電話がずっと鳴って……待ち合わせのところから少し離れてん。……ほんで受話器を取ろうとしたら、待ち合わせの場所にしてた改札口の方から爆発音がしてな……危機一髪ってあいう事をいうんやろうな……。……平次？どないしたん。そんな怖い顔して」

平次の全身に嫌な汗が身にまとう。

そして……。あの手紙の内容が鮮明に頭を過ぎった。

「和葉・・・あんな・・・お前に言っておきたい事があんなにけど」
「・・・・・・・・・・なに？真面目な顔して」

平次は和葉の瞳をしばらく見つめて、そして目線を逸らした。
「・・・いや・・・俺のそばから離れるな。・・・絶対にや」
それだけ言つとあとは無言となった。

「・・・わかった。そうする」
そう言つて和葉は平次の胸にそつと頭をもたげた。

和葉はこれ以上なにも聞かなかった。
目の前にある平次の顔からはいつもの幼馴染の顔ではなく、事件の
時にみせるあの表情が見えていたから。
（また・・・事件なんやね）
事件が自分とは関わっているとはこの時夢にも思っていなかった。

―梅田駅爆破事件―

重傷者・・・1名

軽傷者・・・56名

死亡者・・・0名

(2) (後書き)

前回出てきた黒髪の女性の名前。

あおのぬしれね

青ノ主 玲祢

蘭とよく似た後姿で、和葉も「蘭ちゃんみたい」ってしてしまうほど綺麗で長い黒髪の女性なんです。

和葉よりやや背が高く、全体的に細くて色白。目鼻立ちもしっかりとしたいわゆる美人ですね。

週に2回なんとか更新していこうと必死です。

大体月木目安にUPしています。

書けば書くほど、いろいろ思うところがありまして・・・。

それでも最後まで諦めずに書いていこうと思います。

では・・・。

(3)

その夜。

平次は東京の工藤新一のもとへ連絡を入れた。

新一の知人の阿笠博士に少し頼みたいことがあったからだ。

「明日すぐにでも作って欲しい物があるんやけど・・・」

「・・・めずらしいな博士に用なんて。ちょっと待ってる」

すぐに阿笠博士へ連絡を取ってくれた。

『明日一日空けておくってさ』

その一言に平次は少しホッとした。

『・・・なにかあったのか？』

新一に隠し事は無理だという事をわかっていた。

しかしこうも簡単になにかあると感づくあたり、さすがとしかいいようがなかった。

平次は手紙の事や和葉が狙われている事を告げた。

『・・・多分間違いない。今日の爆破は 警告 だな』

新一はそう言うのと黙った。

その言葉に改めて和葉の身が危ない事を再確信し、携帯を持つ手に思わず力が入った。

そして新一は犯人の心当たりがないのか聞いたが、「ありすぎて」という平次の言葉に自分の身にもいつ起きるか分からない事を痛感しながら協力する事を告げた。

「おおきに。……それと明日東京と一緒に連れて行く事にしたんやけど、俺が外に出ている間和葉を預かって欲しいんや」
「……わかった。蘭と2人で俺の家でしっかりと預るよ」
そう言つて新一は快諾した。

電話を切つた後、平次は考えていた。

「和葉を守る事は勿論だが、犯人を早く捜さなくては和葉だけでなく今回のように沢山の人を巻き込んでしまう……」
平次は少し焦っていた。

目に見えぬ犯人がいつ何処で和葉の前に現れるかもしれない。
いや現れずとも簡単に和葉を傷つけるかもしれないと、今回の事件で思い知らされたからだ。

TVでは今回の事件はどこかの過激派がおこしたテロの一種で、死者が出なくて良かったなどと言っている。

平次はベットに横になりながら一人考えていた。

（ホンマに……なんで俺はあの電話をイタズラやないかと思ひ始めたんや。そのせいで和葉を危ない目に合わせてしもつて……
全く……なにが西の名探偵や）

天井をみつめて大きなため息をついた。

和葉は父親と2人暮らしで、ほとんど一人でいる事が多い。

平次のたつての頼みで今日からしばらくの間、和葉は服部家に住むようになった。

一番喜んだのは平次の母親だった。

理由を知ってるにせよ知らないにせよ、娘ができたかのようなはしやぎ振りだった。

足を怪我した事を知るとすぐに京都の知り合いにわざわざ薬を頼み届けさせた。

「これがよう効くんよ。すぐに手に入ってホンマよかったわ」
そのおかげか和葉の足の痛みも少し引いてきたように感じた。

和葉は足に負担がかからない様に歩きながら平次の部屋に向かった。

「平次・・・ちよつといいかなあ」

和葉が部屋に入ってきた。

「・・・なんやどないしたんや？」

和葉は下を向いたまま何も言わなかった。

「なんなんや。はよ言え。オマエらしゅうないな」

和葉はそれでも下を向いたままだった。

平次は段々と心配になり和葉に近づいた。

「なんかあつたんか？」

和葉は首を横に振った。

「・・・ようわからんけど、取り合えず座れや」

促すように先に平次が床に座り、それに続くように和葉も座った。

「あんな・・・お願いがあるんやけど」

「?・・・なんや言うてみい」

「手を繋いで欲しいねん。アタシが眠るまででええから・・・アカン？」

平次は突然の申し出に一瞬言葉に詰まった。

「・・・手を繋ぐんか？」

和葉が頷く。

「・・・そうすれば眠れるんか？」

「・・・わからんけど・・・多分・・・なんか落ち着いてきたら今日の昼間の事を思い出ししてしもつて」

和葉の不安そうな顔がみえた。

平次は腕時計をみて

「3分・・・で十分やな」

そついうと和葉の前にしゃがみこんで和葉の手をとつた。

「ごめん・・・アタシなんか一人やと心細そうて」

「今日の今日やし・・・しゃーない特別や。ホンマに世話がかかる女やな」

ため息をわざとついてみせた。

「そんなため息つかんでも・・・ところで何が3分なん？」

「オマエが眠りにつくまでの時間や。のび太くんといひ勝負できるで」

ニコニコしながら平次は和葉の顔を覗きこんだ。

「そんなことばかり言うて！」

離れようとした和葉を引き寄せた。

「アホ。大人しくこうしてたらええねんて」

不意をつかれて一瞬焦つたが、和葉は平次の心臓の音に安心してウトウトし始めた。

「アホつて・・・平次はホンマ・・・ムカツク・・・わ」

言つた矢先に和葉の寝息が自分の胸で聞かれた。

「・・・そのムカツク男の胸で眠る女」

平次はそう言うつと優しく笑つて、幸せそうに眠る和葉の髪をそつと撫でた。

今日の事件後から休む暇もなく慌しく時間が過ぎた。そしてやつとできたつかの間の安眠。

（明日は早いのに俺が眠られそうにないな・・・）

なにげなく見た窓の外の桜は、まだ咲いていなかった。

和葉が狙われている事は大滝から平次の父、そして和葉の父へと報告が行った。

しかし内密に事を運ぶ事になり、一部の人間にしか知らされないことになった。

「和葉ちゃんが・・・娘さんが狙われてるんですよ！遠山のおやつさん！」

遠山は必死に訴える大滝をジッとみていた。

しかしでてきた言葉は意外な言葉だった。

「上の命令や。・・・それとオマエが和葉の見張りを頼んだあの2人の事やけど・・・」

「あの2人って・・・澤田と町井ですか？」

「・・・念には念を・・・や。見張っててくれ」

大滝は有無も言わさない雰囲気にかたなくその指示に従った。

(3) (後書き)

今回は少し2人を休ませるような形となりました。

(4)

朝、まだ太陽も昇らないうちに2人は出発をした。

和葉のたつての希望で一泊2日工藤邸へ泊まりに行く事になった。

そして今・・・大きなアクビをする平次と楽しそうに窓の外をみる和葉は新幹線の中にいた。

「犯人がどのように、いつ現れるかもしれない」

緊張感が知らず知らず、平次の疲労に負荷をかけていった。

和葉は何故か今朝から口数が少ない平次が気になり度々声をかけた。

「平次・・・なんか荷物がいつもより多ない？」

「ああ・・・これな。土産や土産。工藤に頼まれてた物や」

「ふん。・・・中になが入ってるん？」

平次の荷物を興味津々に見つめている。

「和葉だけには見せられへん。見たら腰抜かすからアカン」

「なんやそれ」

平次は帽子を深く被り寝た振りをし、それ以上はいくら聞いても無視をした。

諦めて和葉はそっぽを向いて再び窓の外を眺めた。

平次の荷物の中には阿笠博士に頼みたい物が入っていた。

東京駅には新一と蘭が2人来るのを心待ちにしていた。

今回の事件の事を新一は蘭には話さずにいた。

ただでさえ心配性の蘭に必要以上に心配はかけたくないという気持ちと、なによりも和葉との再会を心から喜んでもらいたいという思いからその様に決めたのだ。

「新一！あれ服部君たちじゃない？」

「・・・あいつらなにやってるんだ？」

関西弁で痴話ゲンカをしながら歩いてくる2人。

「うっさいボケ！・・・なんや？あれそうちゃうか？おお、やつぱ工藤と姉ちゃんや！おい、おまつとうさん！」

「平次はすぐそうやって・・・あつ！ホンマや。蘭ちゃん！元気やった？ごめんなあ待ったやろ？」

新一と蘭は相変わらずな2人に圧倒されたが

「う・・・ううん！全然待ってないよ。新一と今来たところだったから。ねっ新一」

「・・・相変わらずそうだな。じゃああつちに車止めてるから行こうか」

新一は右手に持った車の鍵を2人にみせた。

和葉は驚いたように

「工藤君が車運転するん？すごいなあ・・・アタシも早く免許取りに行きたいわ」

「無理やつて。止めとけ止めとけ。大阪の事故率が高なってかなわんわ」

「なんやてゝ！」

そんな2人のやり取りを見ていた新一がヒョイと和葉の荷物を持ち上げた。

「あつ！工藤君自分の物は自分で持つ・・・」

「和葉ちゃん。足怪我してるんだろ？さっきから少し引きずってるから気になってたんだ。」

車まですぐだからそこまで我慢して歩ける？」

「・・・大丈夫。ありがとう」

そんな和葉を見てニツコリと笑いかける新一と、

「えっ嘘！大丈夫なの？肩貸そうか？」

心配する蘭。

新一の行動に顔を赤らめる和葉をみて不機嫌になる平次。

そんな一行を乗せた新一の車は工藤邸に向かった。

工藤邸の駐車場で平次は阿笠邸を訪ねる為3人と別れた。

いつもなら「何処に行くん？」と聞いてくる和葉は蘭との再会を楽しんでいるのか

「じゃあアタシ蘭ちゃん達とここで待ってるわ。平次も出来るだけ早う帰ってきてな」

そう言つて蘭と共に先に家の中に入つていった。

そして平次は新一と軽く目を合わせて無言で頷き合いその場を離れた。

阿笠は快く平次を迎えてくれた。

「いや」大阪の名探偵からわざわざ指名されるなんてのう。で・・・わしは何を作ればいいんじゃない？」

平次は荷物の中からバイク用のGPSを取り出した。

「工藤から何か聞いてます？」

阿笠は困つたように

「新一からは君が非常に困っているからどうしても手伝つてやって欲しいとしか聞いてないんじゃないよ」

苦笑しながらポリポリと頬を掻いた。

「そうなんや・・・事情も説明せずにいきなり頼んでホンマにスイマセン」

平次は深く頭を下げた。

「いやいいんじやよ。君が東京にきたら新一と同様に協力するつもりじゃったから。お安いごようじゃ」

阿笠の言葉を平次は不思議そうにしていた。

「なんで・・・なんて顔をしてるようじゃが・・・。君には心から感謝してるんじやよ平次君。君は新一が薬で小さくなってる時から本当によくしてくれていた。わしだと協力するにもやはり限界があるんじや。そんな時に新一のそばで励まし協力し、元の体に戻るのを必死に助けてくれようとしていた姿に救われる思いがした。だから感謝の変わりに出来るだけ君にも協力はしようと決めてたんじやよ」

「そんな・・・俺は別に・・・なんも」

阿笠は豪快に笑って

「この歳になつてかわいいやんちゃん息子が2人になっただけの事。なんでも言つてくれて構わんよ・・・そんな事よりGPSを使つて何を作ればいいんじや？」

平次の顔が一瞬でこの家に来た時と同じ険しい表情になった。

そして本題に入った。

「こいつで和葉の居場所を分かるようにしてほしいんや」

「フム・・・簡単じゃが・・・相手にも同じようにGPSの端末かなにかもたせないと」

すると長細くちいさな箱を取り出した。

「このペンダントに組み込む事は出来るんか？」

阿笠は大きく頷いた。

「5時間あれば出来るじやろう・・・それとこれはわしからのアドバースじゃが」

2人は30分位打ち合わせをし

「じゃあ出来たら連絡もらうちゅうことで」

「出来るだけ急いで作るとしよう」

そして平次は阿笠邸を後にした。

(4) (後書き)

東京（工藤邸）に場所を移して、少しこの先の準備をしたいと思
います……。

(5)

和葉と蘭は夕食の準備を終えて平次が帰ってくるのを待っていた。

「服部君まだかなあ」

「なんか・・・平次最近なんか悩んでいるみたいで・・・工藤君は何か知らんの？平次からなにか聞いてるんとちゃう？」

いきなり話を振られて新一は読んでいた本を落としそうになった。すると丁度その時チャイムが鳴った。

「俺やゝ開けてくれ」

平次が帰ってきたのだ。

少し痛む足を引きずりながら玄関まで行き扉を開いた。

「おかえり平次！」

「おお・・・なんや。いきなり顔みせんや。ビックリするやんけ」
それでも平次が帰ってきた事に和葉はとても喜んだ。

「失礼やな！・・・平次お腹空いてない？蘭ちゃんと2人でご飯作つたんやで」

「そんなんでもええねん。和葉・・・ちよつとこつち来い。ええもんやるから」

「そんなんって！」

和葉を無理やり外に引つ張りだして、小さい箱を和葉に渡した。

「なんなんこれ？」

「・・・一応・・・なんやプレゼントちゆうか・・・お守りみたいなもんや」

「・・・なんか変やで平次。なにかあつたん？」

和葉は心配そうに平次を覗き込んだ。

上手い言い訳が思い浮かばない平次は焦った。

まさか「お前が狙われてるから」とは言えずどうしても言葉が出てこなかった。

「お守り・・・って。アタシに何か・・・」

「ちやうちやう！そんなんやないんや・・・けど」

その時2人の後ろから新一の声がした。

「違うよ和葉ちゃん。そのペンダントは蘭とお揃いなんだ。俺には似合わないから和葉ちゃんにあげてくれって前に渡したやつなんだよ。今度東京にきたら是非身に付けてきて欲しいってこの前電話で話したんだ」

ニツコリと和葉を見て微笑む。

「なっ？服部」

「お・・・おお！なんや・・・忘れてしもつて・・・たまたまバツクに入ってたんや」

ガツカリしている平次をよそに

「そうなんやあ。蘭ちゃんとお揃いつてなんか嬉しい！ありがとう工藤君！」

そついうと和葉は家の中に戻っていった。

「おい工藤。あのペンダントは俺が恥かしいのを我慢して買ってきたやつなんやぞ。なんであんなデタラメいうんや。まあ・・・和葉には気が付かれずに済んで良かったんやけど」

「半分は本当だぜ。蘭にも同じようなペンダントを渡したからさ」

平次は驚いたように新一を見た。

「まさか・・・オマエの姉ちゃんも」

「そつじゃないさ。だけどいつ・・・そうなるか分からないだろう？俺自身ではなく蘭に刃が向いた時にすぐに助けに行けるようにしておきたいんだ。最近事件が多くて蘭のそばに居られない日が続いててさ・・・そんな時にこの前オマエから電話をもらって、和葉ちゃんと蘭がダブって思えたんだ・・・」

平次も新一も自分の命より大切な人が傷つけられることが何よりも

怖かった。

「工藤・・・」

2人の会話が途切れた時、玄関が開いて蘭が顔を出した。

「ここてなに話てるの？ご飯冷めちゃうからそろそろ中に入らない？」

新一は蘭の肩をそつと抱いて

「そつだな・・・そろそろ行こう」

さつきまでの顔とは違う蘭を見つめる優しい瞳。

「ああ・・・そやな」

そんな新一の姿に平次も和葉の顔が急にみたくなり足早に家の中へと入っていった。

彼女達は食事の片づけをした後、リビングで無邪気に他愛も無い話をしていた。

そんな2人を幸せそうに見つめる彼ら。

いつの間にか彼女達はウトウトし始めの寝室へと戻っていった。

2人が寝室に戻るのを確認すると、新一の表情からは愛おしそうな笑顔がゆつくりと消えて

「例の話・・・詳しく聞かせろよ」

そう言うと言書斎の方へと歩き出した。

「・・・そやな」

平次はリビングのソファから立ち上がり、新一の後に続いて歩き出した。

(5) (後書き)

(4)の続きになりますが……。この回が終らないと話が進まなくて。

次回からは第一章で出てきたヒントを手繰り寄せていきたいと思えます。

ですが月曜までは無理かもしれない(すいません)…。ので来週中には更新出来るように頑張って書きたいと思います！

では失礼しました。

(6) (前書き)

第一章のまとめを二人の話に合わせて書いています。

(6)

新一は書斎のいつもの席へと座り、平次はその真向かいの席へと座った。

「・・・にしても何で和葉ちゃんを狙うんだ？お前心当たりないのか？」

新一の問いに平次は軽く首を横に振った。

「分からん・・・けど俺を恨んでるような気がして仕方ないんや」

「なんでそう思うんだ？」

平次はポケットから一通の封筒を取り出した。

「これが届いたんは5日前やった」

そして平次は赤い封筒がテーブルの上に差し出した。

「その日は俺らの卒業式で、昼過ぎには学校から直接俺の家まで和葉と一緒に帰ってきた。俺は自分の部屋でいつものように俺宛ての手紙を確認しててこれを見つけたんや。それから間もなくして……奴から俺の携帯に電話があつたんや」

新一は肘をついて組んだ手を口元へあて、黙ったままその手紙を見つめながら話を聞いた。

「その夜、俺らの卒業祝いやいうてお世話になっている人たちが家に押しかけてきた。それが大体20時・・・丁度大滝ハンと俺の部屋で話をしていた時や。また俺の携帯に電話があつたんや」

「じゃあ、その日だけで犯人から二回連絡があつたんだな。犯人はなんて言っただんだ？」

「あんな。一回目の時はあ・・・あ・・・。」

平次は言おうとした瞬間、顔を赤らめながら頭を掻いて横を向いた。
「？」

「・・・アカン。言いとうない」

「ハア？なに言ってたんだ。和葉ちゃんが狙われてるんだろ。ちゃんと云つてくんなきやわかんないぜ？」

「わかつてる！そやけど・・・」

何故か言いたくなさそうな態度に、新一は手紙の話に戻した。

「・・・じゃあ・・・先に手紙見るぞ」

そういつて赤い封筒に手を伸ばした。

「ハハ・・・なるほどな・・・。こんな事を言われたわけだ」

「まっ、そう言うこっちゃ。ハハハ・・・」

新一はジツと平次を見て大きなため息をついた。

「わかったよ。で・・・犯人の声は男と女どっちだった？」

その問いに平次は苦い顔をして答えた。

「わからん・・・。機械音で声を変えてしゃべってきたさかい。分かるのはここに書いてある携帯の番号くらいやな」

平次は自分の携帯を取り出してた。そして着信番号を手紙の番号の横に差し出した。

新一はその番号が同一であることを確認し、また封筒を手にした。

「なんか・・・わかつたんか？」

その問いに

「いや・・・なんとなく・・・この封筒が気になるんだ」

平次に封筒を渡した。

「この封筒？」

「ああ」

赤い封筒に黒い羽根のシール。

新一は頭を掻きむしりながら

「…この黒いシールは最初から逆さに貼っていたのか？」

どうやら新一は黒いシールが気になるようだった。

「そうや。中の手紙を見ようとしてそのシールを剥がそうとした時に俺も気になってたんや。わざとなのか、それとも慌てて貼って上と下を間違えたん・・・か」

新一もその事に対して同感だという風に頷いた。

「あともう一つ気になるのはこの前の改札口で起きた爆破事件や。

和葉は近くの公衆電話が鳴ってその近くに歩いて行った言うてたけど、その場におったら間違いなく大怪我やったはずや。・・・和葉を簡単に傷つける事も助ける事も出来るって、まるで和葉を通して俺に挑発してきたようにも思えるんや」

「この手紙の文章からだど、お前に対して疑問形で投げかけてるだろう？YESにしてもNOにしてもお前とコンタクトを取りたがっているのがわかる。そして犯人はお前が和葉ちゃんを大事にしている事知っている人物だが・・・近くの人物だとは限らないな」

「何でや？」

その言葉に不思議そうな顔をして新一に尋ねた。

「お前さ・・・自分で自覚してるのかどうか知らないけど、傍から見ても和葉ちゃんを大切にしている事が一目瞭然で分かるくらい態度に出てるから、必ずしも近くの人物だとは限らないさ」

「・・・そうかあ？」

最近自覚し始めた平次はその言葉に強く反攻する事が出来なかった。少し大人しくなってしまうた平次に対し新一は話を続けた。

「だけでもし・・・この手紙になにかヒントが隠されているとすれば、随分前からお前を知っている人物の可能性も出てくる。前もって手紙にヒントを隠したり、卒業式でお前の母さんも学校に行つて誰も家に人がいない事を知ってその時間を狙ってる。それに携帯や爆弾を準備してからお前に近づいてきた。そしてなにより和葉ちゃんを殺害するとお前が誰よりも苦しみ辛い思いをする事を知って

それを望んでいる。計画を考え機会を伺っていた事から・・・爆破事件も突発的な犯行というよりは」

「・・・復讐犯の可能性が高いちゅー事を言いたいんやな」

新一は大きく頷いた。

(6) (後書き)

急いで書いたので、やや文章が粗いです。

今回たどり着いた結果が『復讐犯の可能性』『平次に対して何か強く恨みをもっている』です。

そして『黒いシール』に何がある？。

ここでいいですが、キッドではありませんのであしからず。

(黒い羽根＝黒羽)

それと2月13日早朝、私のおちよこちよいの為パソコンが壊れました。

画面半分が呪われたように恐ろしい感じで黒くなってダア～と液晶全面がぶれています。なので家で小説を書くのが困難な状態になってしまいました。早急に買うか直すかしたいと思いますが、先立つものがないので……。 (悩)。まあ……。取り合えずネットカフェなどで投稿していきたいこうと思いますが今までのように更新は難しいです。

小説を楽しみにして頂いている方……。 (いるのか?) には本当に申し訳ありませんが暫くは不定期更新となります。今月の末までにはどうにかしますから (涙)

本当にスイマセン……。

(7)

午前零時を告げる柱時計が音をたてた。

その時書斎の扉の向こうで誰もいないはずの足音が聞こえたように思えた。

「・・・蘭か？」

新一は警戒しながら扉を開けたがそこには誰もいなかった。

「？」

もう一度廊下を見渡してゆつくりと扉を閉めた。

古い洋館なだけに誰も居なくても床がきしむ事がある。

平次も新一もそれだけ敏感になっているという事だ。

新一は自分の椅子へと座り

「悪い。気のせいだったみたいだ。・・・どうだ？その手紙が届く前にお前の周りで何か変化はなかったか？その犯人に結びつきそうな出来事とか」

「復讐・・・やろ？そんなん疑い出したらホンマきりがなくらいあるで。そんな中でどうやって犯人を探し出せばええんや。もう少しヒントがあればな」

平次は頭の後ろに手を組みながら天井を見上げた。

「・・・服部・・・その携帯貸してくれ」

「はあ？なんや急に」

新一は平次から携帯を受け取りおもむろにボタンを押し始めた。

「おい！工藤なにするんや！」

慌てて携帯を新一から取り返した。

「いや・・・番号が分かってるならショートメール届くかなって思ってたさ。盗難届け出されてるけど通じるようにしてあるんだろ？」

「・・・そうやけど。こつちから何度かけても出んのや。電源切つてるちゅう事やる?」

大きなため息を吐いて背もたれに体を委ねた。

「それでもないようだぜ・・・」

送信完了の文字を見せた。

「確かに通話は無理かも知れねーけど電源切つてもメールは届く。相手が読んでくれて何か答えてくれればさ・・・なにか一つでも手がかりになるかもしれないだろ」

平次は眉を顰めて

「和葉の命が狙われているんや・・・あんまり犯人を挑発して怒らせんといってくれ。それでなんて入れたんや?」

新一はニツコリ笑ってこう言った。

「簡単に『アンタは俺の事をとでも知っている人だよね?』それだけだよ。さっき言ったとおり犯人はお前とコンタクトを取りたがっているんだ。それも直接話をしていくくらいに。だからお前からのメールが届けば返ってきておかしくないだろ?・・・和葉ちゃんの命がかかっているんだ・・・こつちも慎重に犯人に迫るさ」

新一の自信に満ちた瞳をみて、平次は和葉の事を心配するあまりに焦りながらも慎重になり過ぎていた事に気がついた。

もしかしたらこの事件が始まった時から自分に冷静な判断など出来ないと感じていて、無意識に新一を頼っていたのかもしれない。それはまぎれもなく彼が自分と同等あるいはそれ以上の探偵としての素質を持った人間で・・・なにより信頼のおける人物だったから。平次の気持ちを理解した上で、新一も自分を心を落ち着かせ冷静になるように努めた。

「そやな。取り合えず情報は・・・危険でも一つでも多い方がええしな」

覚悟を決めて、新一の取った方法に賛同した。

「ああ・・・焦る気持ちも分かるがまずは情報が欲しいからな。犯人がみえてくるよう何かを」

時計の針の音が部屋中に響く中、2人は携帯が鳴るまで書斎の本を読みながら気を紛らわしていた。

時計の針が2時半を指したその時

「服部！」

平次は慌てて携帯を取り出した。

「メールがきたで！」

受信メールを開くと平次は息をのんだ。

そして受信画面を新一に見せた。

『オマエノコトハシツテイル

ヒトヲコロスタンテイサン

オマエニモモウスグミレル

アノコノサイゴノスガタヲ』

新一はその文面をみてまた組んだ手を口元へ持つていった。

平次は光る画面を何度も見直していた。

「人を殺す探偵・・・って俺の事いうてるよな？一応はつきり言うておくけど人殺したことは一度もないからな」

新一は「ああ・・・そう」と軽く無視をして一点を見つめたまま動こうとしなかった。

研ぎ澄まされた空気の中、刻々と時間が過ぎていった。

時計は4時を告げようとしていた。

大阪府警では大滝が町井を呼び止めた。

「こない遅くまでご苦労さん。澤田はどないしたんや？」

町井は苦笑して

「澤田の奴今日はデートらしいですよ。なんでもスゴイ美人の人らしいって同期の奴らが噂してました。僕に「お先に！」って仕事もそこそこで帰ってしまいました」

大滝は笑いながら

「そうか、うちの課にもそんな浮いた話があったんやな。で・・・お前はなんの残業や？」

町井はパソコンの画面を見せて

「これです。例の爆破事件の報告書ですよ。近くにいたのが僕だったんで詳しくその時の状況を書いているんです」

「お前・・・そういえば近くにおっいたらしいな」

大滝は町井の表情を伺った。

「はい。あの時は本当に無我夢中でしたから・・・改めて思い出すとゾッとする事件でした。ああいう事件は二度と起きてほしくないです。僕がそばにいたのに大勢の人が傷ついてしまった・・・僕は・・・無力でした」

町井は辛そうな表情で下を向いた。

大滝は町井の肩をバシッと叩き、

「俺らはそれでも市民を守っていかなあかん。未然に防げるものは最大限の努力をし、事件が起きてしもうたら速やかに解決する。足を止めてる暇はないんや。後悔してる暇があるなら後悔せんくらい動くんや」

町井は顔を上げて大滝の顔をみつめた。

「大滝警部は・・・言われたとおり素敵な人ですね」

大滝は急に照れくさくなり

「上の人の受け売りや」

そう言っつてその場を去っていった。

大滝が出て行くのを見送った後町井は

「僕はやっぱりここにきてよかった・・・」

そう呟くと笑みを浮かべパソコンの画面に向かい合った。

(7) (後書き)

ストーリーとは全く関係ありませんが……。
(ですので読まなくても結構ですよ)

もともと東京に来る予定だった平次。

その目的とは。

4月から小さくてもいいから探偵事務所で働きたいという事で職探し……という設定。

平次ほどの腕があれば一人でもいいのだが、今までは自由気ままにしていた分、4月からは東京の大学に通い一人暮らし……親に頼らず生活分は自分で稼ぎそのお金で生活をする(将来の為の下積み)……といったところでしょうか。

あと和葉の住む所の下見もしておきたい(治安や隣近所の住人の事等)……まあ彼なりにいろいろ考えているみたいです(笑)

結局今回の事件でゆっくり見る事が出来なかったようですが……。

さてさて事件ですが、大阪の方でも大滝が2人に探りを入れ始めました。最初に町井から(たまたまそこに居たから)。

そして東京では悪戦中の2人。このメールから何を考え何を導き出すのか……。

私の勝手な考えで話しが進んでいます。そして勝手に突っ走ります

！本当に迷惑おかけします！

「新一。起きてる？」

書斎の扉をノックして蘭が入ってきた。

新一と平次は慌てて手紙と携帯を隠して蘭の顔をみた。
そんな2人の行動にキョトンとした顔で

「やだ…なに？私の顔に何かついてる？」

「いや…どうしたんだ？まだ起きるには少し早くねーか？」

新一は書斎の扉まで行き蘭の顔を心配そうに見つめた。

「ちよつと眠れなくて…。水を飲もうと思って起きてきたら明かりが点いていたからこつちに足が向いてしまつて…また事件？」

新一と平次は顔を見合わせた。

「まあ…そんなとこだな。なあ服部？」

「ん？おお…せやせや。集中しすぎてこんな時間になつてもうたんやな」

わざとらしく平次は時計の方を向いた。

蘭を安心させようと新一は笑いかけたが、その期待とは裏腹に暗い表情を蘭は見せた。

「新一…私に出来る事があつたら言つてね」

「ああ…そうする。だからもう一眠りして俺にコーヒーを7時頃に入れてくれないか？」

「……………うん」

「？」

「…あつ！ううん。7時にコーヒーね！…じゃあもうちよつと寝ようかな。新一も…頑張つてね」

そう言つと蘭は自分の部屋へと戻つて行つた。

(蘭？)

新一は浮かない顔の蘭にやや心配しつつも、もとの椅子へと戻つた。

「なんや姉ちゃん、工藤が恋しくなつて寝られへんとちゃうか？一緒に寝てやつたらどうや？」

ニヤニヤしながら新一の顔をみてからかった。

「…つまんねー事言つてんじゃねーよ。それで…お前は何か分かったのかよ」

頬を赤く染めてそっぽを向いた。

「そやなあ…。このカタカナの日本語がなんか違和感があるように思えんねん」

平次はポケットから携帯を取り出しさっきのメールを開けた。

「このカナを直すと『お前の事は知っている。人を殺す探偵さん。』

お前にももうすぐ見れる。あの子の最後の姿を』や。この三番目のお前にももうすぐ見れる…ってどうやる？お前にもちゅー事は犯人の奴も何か見る事があるようにも思えへんか？」

平次の問いに新一は肯いた。

「さっきお前が言つてただろ？人を殺した事がないって…。もし人を殺した事で恨みがあるなら『殺した』と書く方がお前に対してのメッセージでありそれに対する復讐とも捉えることが出来るが、『殺す』と書かれていいるという事どちらかと言うと予告…これからを指してるように思えるんだ。だからこれから人を殺すって事っていう風にも考えられないか？…あと『見れる』ってはっきり断言してる事も気になる。これは何かが決まって形でお前に伝えたがってるのかもしれないな」

平次の何かが頭の中でよぎった。

「いいか服部。あくまで推測だがまとめるぞ。犯人はお前の事を知っている人間である。第三者を含めてだ。そしてお前はこれから人を殺すと告げている。犯人も同じように人が殺される事がわかつて

いる。最後の文は……これは…絶対にあってはならない事だ」

そして平次はその何かに気づき頭を横に振った。

（まさか…そんな訳ないやろ。あの人は今…）

あからさまに動揺している平次に心配になって新一は近づいて声をかけた。

「おい…服部。顔色が悪いぞ大丈夫か。…和葉ちゃんの事で最近休めてないんだろ？少し横になつたらどうだ？」

「……そうやな。ちょっと疲れたみたいや。2時間くらい横にならしてくれ」

「ああ…ゆつくり休めよ」

「おおきに」

そう言うとき平次は書斎から自分に用意された部屋へと出て行った。

柱時計は午前五時を知らせる音をたて、それぞれの思いの中皆に暫しの休息の時を告げた。

大阪の服部家では静華が新聞を取りに玄関を開けた。
すると郵便受けのところに長い黒髪の女性が一人立っていた。

静華は不信な顔つきでその女性に声をかけた。

「どちらさん？うちになにか用ですの？」

その女性は静華に気がつくとき大きく頭を下げて

「服部平次さんと遠山和葉さんに…この前の大阪駅の改札口爆破事件の時に世話になった青乃主玲祢といいます。近くにきたので家だけでも確かめて後でお礼に来ようかと思ひまして…。その節は息子さんにお世話になりました。ありがとうございました」

静華は和葉からこの女性の事を足の手当てをしてる際に聞いていたのですぐに理解できた。

「ああ！大変でしたなあ…発作の方はもう宜しんですか？」

「おかげ様でこのとおり」

そう言うとき彼女は笑い、つられて静華も笑った。

「今、平次も和葉ちゃんも東京に行ってるんやけど、今日帰ってくる予定やし顔を見せに来てやってくれると2人とも喜ぶと思うわ。特に和葉ちゃんはおあなたの事気にしてたようやし」

「ほんならまた伺わせてもらってもいいですか？」

静華は笑顔で肯いて「いつでもどうぞ」と言った。

玲祢は嬉しそうにお辞儀をしてその場を去って入った。

静華は玲祢を見送った後、新聞をポストから取ると家へ中へと入っていった。

(8) (後書き)

と、いう風にかなり犯人に近づいたかな(?)。この先もどんどん展開するにあたり、評価&コメントでネタばれしていく可能性を避ける理由により一時的に閉じさせてもらいます。

モモ様：いつも励ましのコメントありがとうございます。しばらくは閉じさせてもらいますが最終話まで気長に応援していただけたら…なんて思っています。

パソコンは結局直らないと言う事で新しいのを買うことに決めましたが…先立つものがないので…それまで更新が不定期になります。それなりに頑張るつもりです！最低でも1週間以上は空けないよう努力します。

(あんまり空けると私も忘れてしまうので…)

では…また次回後書きにて…失礼いたします。

蘭と和葉は7時前には起きて朝食の準備をし始めた。

工藤家の冷蔵庫の中身が以外と充実している事に和葉は驚いた。

「工藤くんて一人暮らしやんなあ。料理とか作ったりするん？」

「新一は簡単な物は自分で作るけど、ほとんどは私を作るために材料を買ってきて置いてあるの。新一のお母さん…有希子さんにも新一は一人じゃ何もやらないから宜しくって頼まれてるし。一応、体調管理とかサポート出来るところだけでも…って思ってるんだけどね。当の本人があんなふうは無茶ばかりするでしょう？…私が助けられる事ってその位だし…ちよつとは自分の体の事を考えて欲しい…なんてアイツには無理だよな」

小さくため息をついてお湯を沸かし始めた。

「蘭ちゃんの気持ちちが手に取るように分かるわあ。お互い大変な幼馴染を持ってしまつて悩みはホンマ尽きへんなあ」

本当に困つたような顔で和葉もため息をついてみせた。

「フフ…本当に私達ってよく似てるよね」

2人は笑い合いながらも手際よく着々と朝御飯の準備は進んでいった。

蘭が何気なくボウルを取ろうとした時、和葉はフツと蘭に何か違和感を感じた。

「蘭ちゃん…工藤君からもらったペンダント今日はしてへんねんなあ」

蘭の体がビクッ動いたが、ゆっくりと振り向いた顔はいつもと変わらない笑顔だった。

「あれね…実は昨日の夜に私の不注意で洗面所の排水溝に落としてしまったの…」

「えっ！大変やん！アタシもう一回見てきてあげるわ！」

急いで洗面所に行こうとした和葉を蘭が止めた。

「和葉ちゃん！…ごめん。私なりに精一杯探してみたけど無かったから…。でも新一には内緒にしていね。私から頃合をみて話すから…お願い」

和葉に向かって蘭は手を合わせてお願いってポーズをとった。

「…蘭ちゃん…分かった。この事は暫くは2人だけの秘密にしよう」

和葉の優しい笑顔に蘭は頷いて「ありがとう」と言った。

「でもちゃんと工藤君にはちゃんと言わなアカンよ」

「そうだよね…あっ！7時に新一にコーヒーを持って行くんだったちよっと思って来るね！」

蘭は入れたてのコーヒーを持って新一の部屋へと向かって行った。

（蘭ちゃんて意外とお間抜けさんなところがあるんやなあ…）

「よし！残りをパパッと作ってしまお！」

気合を入れなおし、コンロに火を点けて手際よく並んでいる材料を片付けていった。

暫くすると平次が大きなあくびをしながらリビングにやってきた。

「ん？和葉一人で何してるんや？」

「朝ごはんの準備や。蘭ちゃんは今工藤君のところにコーヒー持って行ってん。見て！これ2人で作ったんやで。どうビックリしたやろ？蘭ちゃんメツチャ料理上手やねんで」

平次はテーブルに並べられた料理に軽く目をとおすと「和葉はどれ作ったんや？」と聞いた。

「アタシは味噌汁とだし巻き卵しか作ってないねん」

それを聞くと平次はだし巻き卵を一口頬張った。

「平次！行儀が悪いで！」

「毒味や毒味！朝からウツサイ女やなあ…それより和葉。今日11時の新幹線で大阪に帰るから支度済ませとくんやで」

「えっ？昼過ぎちゃうん？蘭ちゃんと帰る前に買い物の約束してしもうたもん」

頬を膨らませて抗議する眼差しで平次を見た。

「ちよつと用事を思い出して…スマンなあ。姉ちゃんには俺から説明するさかい」

そう言うともう一口卵を口に入れると、自分の部屋へと戻って行った。

「なんなん！いつも勝手なんやから！……全く…もう…仕方ないなあ。…急いで帰る用意せなあかん」

和葉は平次に振り回されている自分がいささか嫌だったが、いつもの事とすぐに心を切り支度を急いだ。

東京駅で新一と蘭に見送られ、新幹線へと2人は乗り込んだ。

新幹線の中では横浜駅を越した辺りで平次が席を立った。

「俺、ちよつと小便に行つてくるわ」

「うん。わかつた」

平次は大滝に電話を入れる為に、和葉に気づかれないようにその場を離れた。

「ああ大滝ハン？ちよつと聞きたいんやけど…坂田ハンて大阪拘置所にいてるやんなあ。いきなり面会とか出来るやるか？」

『普通無理やな…そやけどこんな仕事してると向こうの所長とも顔馴染みなつてもうてな。頼んでみてもええけど…坂田がどないしたんや？』

「会つて確かめたい事があるんや…」
そう言うのと平次は黙ってしまった。

『…まあええわ。大丈夫やと思うけど一応確認してみるさかい10分後に電話かけ直してくれるか？』
そう言うのと一度電話をきった。

平次は一旦何食わぬ顔で席に戻ると、和葉がお守りの数を確認していた。

「何してるんや？……にしてお前お守り持ちすぎとちやうか？前より増えてるやろ」

「ええねん！一つ一つにそれぞれの願いを込めてるんやから。……分かん物もいくつかあるけどそれはそれや。どれも大事やねん」
お守りを急いで片付けようとした時、和葉はペンダントを下に落としてしまった。

「あつ」

平次はそれを拾って和葉に渡した。

「和葉…このペンダント。俺がいつて言うまで肌身離さず持つとけ。…これには俺…………いや、俺と工藤からお守りとして2人に買ったやつなんやから…」

はつきりと自分が買ったとは言えない平次は少し自己嫌悪になった。

「そうなん？工藤君からじゃなくて？」

「お前がいつもいらん心配をするから…そやからあの時もなんて言えばいいんか分からんかったんや。取りあえず『それ』は俺からやから。無くしたらホンマにシバクからな……………あつ！そろそろ10分経つな。俺ちよつとトイレに行つてくるわ。さっきもトイレ混んでてん」

慌しく立ち上がりドアの向こうに姿が見えなくなった後、和葉はそのペンダントを自分の首にかけた。

（そうなんや…。平次からなんや…平次から）

窓には嬉しくてこみ上げてくる笑顔を必死で抑えようとする和葉の姿を映していた。

『おお平ちゃん！大丈夫やった。今日の夕方面会時間がとれたで。16時40分からやったらええって言うてたけど、その時間でもええか？』

「…いろいろおおきにな」

かなり無理を言って掛け合ってくれたに違いない大滝に感謝をした。
『そやけど…坂田に会っても大丈夫なんか？平ちゃん坂田の…あの事件の事をえらい気にしてるやろ？』

「……気にしすぎやって。大丈夫や。ちょっと会って確かめたい事もあるし……」

『……あんまり無茶したらあかんで……それとな平ちゃん坂田な……』

大滝が何かを言いかけたその時、平次のすぐ後ろで和葉が急に現れ声をかけてきた。

「平次誰と話してんの？まさか……女」

「アホな事言うな大滝ハンや！今話が終わったとこや。大滝ハン！電話切るで！」

そう言う勢いよく一方的に平次は電話を切った。

「なんでお前がここにおんねん」

「アタシはトイレに来たんや！平次こそトイレいうてコソコソ電話なんかしていやらしいわ」

平次は切った電話が少し気になったが、そのままにして和葉と共に席に戻った。

(9) (後書き)

平次が坂田に会いに行きます。

大滝の電話の続きをこの時平次が聞いていたら…違う結末だったのかもしれない。

只今、評価感想蘭をネタばれ防止の為閉じています。
ので…ここで。

ももさまへ…はい！頑張りますよお！またぜひ読んで下さいね！

(10)

大阪拘置所

面会室に平次は通されてた。

そこにはソファアが向かい合わせにあり、普通の応接間のような感じがする部屋だった。

坂田が犯したあの事件以来、いや…判決が決まってから会うことを躊躇っていた平次は、どのような顔で会えばよいのかと心の中でいまだに葛藤していた。

間もなくしてそこに坂田は看守と共に入ってきた。

平次は思わず席を立て、坂田が歩くのを目で追いながら席に着くのを静かに見守った。

坂田は平次の正面の席に座った。

「平次君…もう会えないかと思うてた…来てくれてありがとう」
かなり痩せてしまって弱々しく笑う坂田に平次は思わず息を呑んだ。

(俺のせいで…)

目頭が熱くなるのを堪えて正面を向いた。

そして深々と頭を下げた。

「…ずっと来んですいませんでした。ホンマならすぐにでも来た方が良かったのかも知れんけど、判決を聞いた後に坂田ハンに会うのが…自分にはどうしても出来んくて」

坂田の目を見ず下を向いたまま平次は次の言葉を待った。

静かで優しい声が平次に話しかけた。

「何も気にする事なんて無いですって。平次君は僕を助けてくれようとしただけやないですか。むしろ感謝してるくらいやのに…だから頼みます平次君、どうか頭を上げて座って下さい」
坂田は平次に優しく笑いかけた。

「あの業火の中で僕は死ぬつもりでした。その命を救い上げてくれたのは平次君やないですか。…僕はあれから考えました。そして…この命を最後まで…大切にしていこうて決めたんです」

平次は顔をゆっくりと上げた。

そこには昔と変わらない坂田の笑顔があった。

もう一度坂田は「どうぞ座って下さい」と促し、平次もやっと心を落ちつかせソファに座ることができた。

そして暫く沈黙が流れ、先に口を開いたのは坂田だった。

「今日は何か思う事があって…僕を尋ねに来られたんちゃいます？」
平次が言いにくそうにしているのに感づいて坂田が話を進めた。

「…和葉が狙われてるんです。心当たりはないか聞きとって来ました」

「和葉ちゃんが狙われている？」

平次は犯人からの手紙と携帯のメールを見せた。

坂田はそれをしばらくみて考え込んでいたが首を横に振った。

「せっかく訪ねてきてくれたんやけど…力になりそうにないみたいや。スマンな平次君」

平次は坂田の顔をずっと見ていたが、特に嘘をついているようには見えなかった。

（空振りやったまいたいやな）

「そうですか…。じゃあ、坂田ハンがもし何か気になる人物とか思い出したら俺宛に連絡してもってもええですか？」

「分かった。何か気になる事でも思い出したら主任さんに伝えて平次君に連絡してもらおうようにするわ…。そう言うても明日までしか時間はないけど」

「えっ？」

平次は自分の耳を疑った。

「僕の死刑は明日なんです」

その時犯人からのメッセージが頭をよぎった。

ヒトヲコロスタンテイサン

ヒトヲコロスタンテイサン

ヒトヲコロスタンテイサン

足が自然と震えだし、それを手で抑える様に前へ屈みこんだ。

そして今まで触れずにいた気持ちが徐々に溢れ出した。

「間違ってたんか…坂田ハンが死ねば俺は殺人者と一緒や…。俺がアンタを殺したも一緒なんや！！あん時に俺が追い詰めなければ！！」

「落ち着いてくれ平次君！落ち着くんや！」

「そうやあん時見逃して、俺も何も気づかずにいれば…証拠なんて集めなければ良かったや！」

その瞬間平次の頬に鈍い痛みがして、右側に倒れそうになった。

看守が一斉に坂田を取り押さえようと、後ろから羽交い絞めにした。

「平次君！君は…君だけはそんな事をいうたらアカン！俺は君に感謝してる言ったやろ？僕は平次君に止めてもらって良かったと思うてる！僕の心の闇に光をくれたんや！恥じたらアカン！悔いてもアカン！そのまま前を向いて僕みたいな奴を助けてやってくれ！」

「…坂田ハン」

「自分ではもう止められないから、君のように全力で助けてくれる人間が必要なんや！」

坂田は叫びながら必死に平次に訴えた。

「例えこの命が人の手で消えてなくなっても、平次君…君のせいじゃないんや」

平次の左目から涙が零れた。

「もしも…また僕みたいな奴がおつてもその気持ちだけで十分や。
…平次君が僕に見せてくれた正義と信念は無くさんといってくれ…」

頼むから約束してくれ」

平次は拳を硬く握った。

「約束や……坂田ハン……」

坂田が大きく頷くと同時に、看守に引つ張られるように部屋を出て行こうとした
その時

「平次君…大切なものは自分の命をかけてでも守る。それが僕の信念であり正義やった。愛する人が悲しんでも…自分には何も出来なかった。和葉ちゃんの事…しっかり守ってやるんやで。平次君の信念と正義のもとに…」

顔が見えなくなる一瞬にみえた孤独と深い悲しみの表情が、坂田が去った後もいつまでも平次の心の中に残りその場から動かせないでいた。

(10) (後書き)

坂田の事はもう少し進んだら短編で紹介します(きえない翼バージョン)

平次は今回…。んゝ…て感じ(いつもだけど)

珍しく2日連続の更新です。でも今週はここまでです。ついでに言うところで2章(見えない影)は終了で次回から3章に入ります。

早いもので14部です(私の予定ではこちら辺で終わる予定だったのに…)なんとか皆さんに励まされここまでできました。ありがとうございます。

3章は展開が早くなりそうな予感です。私頑張れ!

今回は来週の月曜日更新予定です。

*只今感想評価欄をネタばれ防止の為に一時的に閉じさせて頂いています。

ので…こじで。

CAFELATTE様……ありがとうございます!そう言って頂くと本当に嬉しいです。頑張ります

第3章 歪んだ旋律 (1) (前書き)

第3章　歪んだ旋律（1）

大滝は拘置所から少し離れた所で、平次が出てくるのを車の中で待っていた。

（大丈夫やるか…。やっぱり一緒に行つてやったほうが…）

門から出てきた一人の少年に大滝は反応した。

（ん？あれは平ちゃん…）

平次は神妙な面持ちで拘置所の門を出ると、すぐに立ち止まった。

大滝は心配になり車から降りて、ゆっくりと平次に歩み寄り声をかけた。

「平ちゃん・・・大丈夫か？」

その言葉にフツと笑みを浮かべ、振り返り拘置所の高い塀を見上げた。

「平・・・ちゃん」

大滝は平次が心のバランスを壊してないかそれだけが心配だった。

「大丈夫や」

そう言つて振り向いた平次の顔には怯えていた影はもう見えなかった。

まるで迷いを振り払ったかのような表情に、逆にそれが無理をしているのではないかと心配している大滝に平次は答えた。

「俺は大丈夫や…。それどころか坂田ハンに会つて心がスッキリした。今日会えてホンマに良かったと思うてる。もしも会わなかったらずっと後悔してたはずや」

その少し大人びた表情に大滝は頷いた。

（平ちゃんが…また1つ遅しく見えるわ）

坂田の死刑の日が決まったことを言うべきか迷っていたが、あの時
言わなくて良かったと平次の顔をみてホッとした。

（もし言っていたら…平ちゃんは自分を責めて会いに来んやっただかも
知れん。結果これでよかったんやな）

「平ちゃん。和葉ちゃんの所にそろそろ戻るか？」

「そやな。そんで…ちょっと急いでくれるか？」
「？」

「和葉が狙われるは今日から明日の可能性が高いんや」

「なに！それホンマか！」

「ああ。そやから…」

いい終わらないうちに大滝は運転席に乗り込んだ。

「はよ平ちゃん！スピード上げて行くで！」

平次も急いで車に乗り込んでシートベルトを締めた。

暫く車を走らせたところで大滝が平次に聞いてきた。

「ところで…和葉ちゃんを狙う犯人の事やけど坂田から何か聞いた
んか？」

「…ああ。最初は空振りや思ってたけど、1つ気になる事を聞いたん
や。で、大滝ハンにちよつと聞きたいことがあるんやけど…でも
その前にちよつと和葉に連絡して安否の確認だけするさかいに坂田
ハンの話は待っててくれ」

平次は携帯を取り出してメモリー000を押した。

「一応、澤田と町井を服部家周辺の警備を頼んだんやけどな…」

「…一応、声を聞かんと安心出来へんねん」

その言葉に大滝は何も言わなかったが、こんな状態でなければ微笑ましい事やのにと少し残念な気がした。

―服部家―

「急にスイマセン。和葉さんのお家に行ったらお留守やったもんで…」

「気にせんとして下さい！最近ずっと平次の家にお世話になってるんです。お父ちゃんは最近仕事が忙しい言って家にほとんどおらんし、アタシがこの前の事件で足痛めてから平次んとこのオバチャン

が心配して家においてくれて・・・で、それからずっとアタシはこ
っちにいてるんです」

服部家の座敷にはお茶が二つ用意された。

「和葉さんには…あの時よくしていただいて…ありがとございま
す」

「玲祢さんも体の調子が良さそうで。心配したんですよ」

自分の事のように心配してくれていた和葉に思わず玲祢は嬉しくて
笑ってしまった。

「和葉さん。私の名前を覚えてくれたんですね」

「青乃主玲祢さんやろ？変わった名前やったから。それに…アタシ
の東京の友達に少し似てて他人の気がしなかったんです」

和葉は目の前にいる長い黒髪と綺麗な顔立ち、そして優しい感じす
るこの女性に蘭の姿とダブらせた。

（よく見ると自分より年上…。蘭ちゃんも大人になったらこんな感
じになるんかなあ）

蘭に雰囲気似てるといっただけで、親近感が和葉には生まれていた。

暫くすると2人のもとへ、静香が和菓子を持って入ってきた。

「これ2人で食べててな。ウチはちよっと出かけてくるさかいに」

「オバチャン何処に行くん？」

時計を見ると18時を過ぎており、日は沈み辺りは薄暗くなってい
た。

「さっき電話で府警の人から電話があつてなあ…。ちよっと話があ
るらしいんで行ってくるわ。まあ今夜は雨も降るらしいし、あの人

の傘もついでに持って行こうと思うてね」

「でも外は暗くなるし、オバチャンの事心配やし…アタシが行ってくるわ」

和葉は勢いよく立ち上がった。

「あつ。ほんなら私も…そろそろ失礼して」

玲祢も一緒に立った。

そんな2人を静香は制止させ

「出来るだけウチも早うに帰ってくるようにするけど…2人で平次を待っててもらえないやるか？フツ、こんなベッピンさん達に迎えられたらウチのアホ息子もビックリするやろなあ」

静香の微笑みに2人は断れない雰囲気になり顔を見合わせた。

「あら、もうこんな時間やないの。平次の晩御飯の事やけどあとは温めるだけやから…」

「わかった。もし平次がもし足りない言うたら、ある物で簡単に何か作って食べさせるようにするわ」

「そう言ってもらって心強いわあ。ほんならお願いしてちょっと行ってくるわ。和葉ちゃんとはちゃんと留守番しててや。もう外は暗いし…家から出たらあかんで」

和葉は頷いて静香を見送った。

「平次君のお母さんで美人で素敵な人やね」

出て行った静香を見届けると玲祢はそう呟いた。

「厳しいけど優しくて…アタシにはお母ちゃんがおらんからあんな人になりたいって思ってる」

玲祢は意外そうに聞き返した。

「お母さん…おらんって？」

「小さいときに…死んでしもってん」

「あつ……ごめんなさい」

いけない事を聞いてしまったと玲祢は手を口にあてた。

「ううん…気にせんといてください。もう…慣れてますし、今はみんなが居てくれるから」

そう言うといつも笑顔を作って見せた。

その笑顔を見て玲祢は静かに自分の事を話した。

「……実は私も親が死んで…。だから和葉ちゃんとは少し似てるかもしれないね」

和葉の顔から作ったばかりの笑顔が消えた。

そして玲祢は下を向いて呟いた。

「それでも好きな人が傍にいてくれたから…私は大丈夫やった」

和葉はその言葉に平次との幼い記憶を思い出した。

小さい頃は和葉より平次の方が遥かに遊びに誘ってくれる回数が多かった事を

（もしかして平次の思いやりやったんかなあ？）

そして少し笑った。

（平次…）

静香が家から出て行って30分位立ったその時和葉の携帯がなった。着信画面には平次の名前が出ていた。

「平次からや…玲祢さん、ちょっとごめんな」

そう言つと縁側の方へと場所を移して話始めた。

『今からそつちに帰るわ』

「どれ位で家に着くん？お客さん来てはるんやで」

『誰？』

「この前改札口で爆破があつた時苦しそうにしていた…」

『ああゝはいはい。…ん？…なんで俺の家におんねん』

自分の住所を教えた覚えが無い平次はいささか不思議に思ったが、後で誰かに聞いたのかもとも考えた。

「なんでもええから早く帰ってきてな。あんまり待たせるのは失礼やろ？」

『…わかつた。じゃあ出来るだけ早く帰るよつて…和葉は家から出たらあかんで』

「なんでなん？」

『ほな。30分位で着くと思うから』

「…気をつけて帰ってきてな」

「…平次君？」

玲祢の声に和葉がビクツと振り返る。

「ああ…今から急いで帰ってくるみたいです。もうちょっと待つてもらつても…」

「私は全然かまわへんけ…クシュ！」

玲祢はくしゃみをした後、両手で腕を擦った。

「あつ！玲祢さん寒かった？長々ここ開けてしまつて」

そう言つと急いで障子を閉めて、体を温めようとお茶を注ぐとしたが急須の中にお湯が入って無かつた。

「ちよつと台所に行つてお湯を持ってきますね。玲祢さんはここに

いててください。

玲祢は頷いて部屋に残った。

玲祢は和葉が部屋から出て行くと同時に携帯を出してメールを打ち始めた。

平次は大滝の車バトカーに乗って自分の家へと向かっていた。

「和葉ちゃんは大丈夫やったんか？」

「ああ。俺の家にいて電話にも出たから大丈夫やろ」

平次は携帯を閉じてため息をついた。

そして先ほどの話の続きを始めた。

「坂田ハンが最後に言うてた。『大切なものは自分の命をかけてでも守る。それが僕の信念であり正義やった。愛する人が悲しんでも…』って。坂田ハンの言う愛する人って誰やる？やっぱりあの事件から20年前に亡くなったお父さんの事をさしてるんやろか…」

平次は真っ直ぐと前を向いたまま大滝に問いかけた。

大滝のハンドルを持つ手に汗が滲んだ。

「平ちゃん…。坂田には…恋人がおるんや」

「！」

「今でも毎日のように面会に来てるらしいわ…坂田自身は彼女と別れた言うてたけど彼女は認めたくないみたいでな。…何遍か会った事があるんやけど綺麗な子やったなあ。幸せそうに2人で公園をよう歩いていたのに…坂田があんな事件さえ起こさなければ今頃は結婚してたかもしれへんな…」

大滝は寂しそうに言った。

「その人の名前は…」

「確か…玲祢やったと思う。青乃主 玲祢っていう名前やったはずや」

第3章へ歪んだ旋律へ（1）（後書き）

はい。

という訳で第3章が始まりました。

初っ端からこんな感じになりましたが、ここから書きたかった事を頑張って書いていこうと意気込んでおります（なんちゃって・・・爆）

坂田に辿り着いた平次は自分の気持ちのけじめと、犯人へのキーワードを手に入れます。

焦らずゆっくりと書いていきますので、もう少し頑張って読んでみて下さい。お願いします（笑）

(2)

(和葉！)

「大滝ハン… 大変や。その玲祢って女が今… 俺の家に」
「なんやて！」

大滝は驚いて一瞬平次の顔を見た瞬間

「大滝ハン前！！」

「うわぁ！！」

対向車をかわして、ガードレール脇に車が急ブレーキで止まった。

「… 取り合えず急いでくれ！和葉が危ないかも知れん」
「… … …」

何か考えてるように大滝は黙って動かなかった。

「大滝ハン！」

そして平次の声に頭を横に振り大きく息を吐いた。

「… … … 分かった。ちよつとスピードあげるで」

しばらく車を走らせると平次の携帯が鳴った。

「なんや！この非常事態に… … … この番号！」
急いで携帯に出るとすぐに相手から話が始まった。

『… … アノコ… … イマ… … ヒトリ』

「おい！待て！お前青乃主玲祢か？そうなんやろう！！」

『・・・・・・・・・・』

「和葉に・・・和葉に手を出したら…俺はお前を絶対許さへんで」

『カノジョノシガサキカ
ツカマルカノガサキカ・・・』

「お前！」

『ハヤク オ イ デ』

含み笑いを交えたその声は、平次を挑発していた。

「お前・・・笑いながら言うつとるやろ」

楽しんでいるようにさえ思えるその言葉に、怒りが徐々に湧いてくる。

「ジカンマデマツテアゲルカラ」

そして電話は切られた。

和葉の隣で笑う女の影が平次の頭をかすめた。

平次はハッとして和葉の携帯に急いで電話をかけ直したが通じなか

った。

「くそっ！」

「平ちゃん・・・今の電話犯人からやったんか？」

「ああ。和葉が犯人に捕まったようや・・・そうや！家にオカンがおるはずや・・・頼むで・・・出てくれ」

今度は母親の携帯に平次は連絡した。

「あつ！オカンか？和葉そこらにおるか？電話に出えへんねん・・・えっ？なんで家におらんで・・・府警からオカンに電話が？・・・えっ・・・間違いつて・・・分かった・・・ああ・・・あとは自分でなんとか和葉を探すわ」

平次の母親も和葉に連絡を入れたが繋がらないと慌てていたと平次に告げた。

大滝はその平次の会話で大体の事情が把握できた。

そして平次が坂田に会いに行っている間に和葉の護衛を頼んでいた2人を思い出した。

「そうや平ちゃん！あの2人に連絡入れてみい」

「ああ！澤田ハンと町井ハンか！」

平次は急いで2人の携帯に電話をかけたが、どちらも繋がらなかった。

「・・・どつちの携帯も繋がらへん」

「まさか・・・」

「まさかって、何や？」

大滝は先日上からの命令で2人を見張るように言われた事を思い出した。

「あんな…平ちゃん。あの2人の事やけど」

「あの2人って澤田ハンと町井ハンの事か？」

「・・・上から見張れ言われてたんや。平ちゃんには言っていないけど爆破事件の後に遠山のオヤッサンに和葉ちゃんが狙われてた可能性がある事を報告をしたんや。そんな時に上から内密で2人を見張れ言われてな・・・ほんで俺なりに見張ってたんやけど、2人とも仕事も一生懸命やし人からも好かれてる・・・そんな変な感じは全くなかったんや」

「あの2人が爆破の事件に関係がある・・・」
平次は考え込んだ。

（玲祢いう女は坂田ハンの恋人。俺を憎んでも仕方がない。一番和葉を狙う犯人に近いかもしれへん。

そんであの2人・・・。

爆破事件に関係あるとするなら・・・もしかしたら今回の事件に関係が出てくるかもしれへん。

確か町井ハンは東京出身で澤田ハンは大阪出身やったな・・・もしもこの2人が爆破に関わる犯人やとしたら動機はなんなんや・・・？

それに坂田ハンにも関わりが出来てくるはずやけど・・・そういえば若い頃東京に、坂田ハンは仕事で行った事ある言うてたこ

とあったな。それとも大阪で会う確率からやと・・・澤田ハンか？)

犯人は玲祢を含めて3人の容疑者が浮かび上がる事となった。

平次は一気に謎めいた頭を左手で掻いた。

「平ちゃん・・・家に着いたで」

明かりがついたままの家。

まだ19時前だというのに辺りも静かで緊張感が嫌でも高まる。

平次と大滝は顔を見合せて頷きあい、家の門をくぐった。

(2) (後書き)

容疑者が3人に・・・。

(3)

玄関に入ると和葉の靴がいつもの定位置に、きれいに揃えて置かれていた。

(和葉…頼む…居てくれ)

平次は祈るように家の奥へと進んで行った。

いつもなら台所で和葉と平次の母親が夕飯の支度をしながら、2人の笑い声に迎えられて帰宅するはずのこの時間。

人の気配が全くない台所に平次は立った。

コンロにはお湯を沸かした跡があり、やかんからは湯気が微かに見えていた。

(火は止めてある…)

テーブルの上には平次の晩御飯であろう物に布巾がかけてあった。

(特に変わった所はないみたいやな…)

平次が居間の方へと足を向けた時に大滝の呼ぶ声がした。

「平ちゃん！ちょっとこっちにきてみい！」

大滝の声のする方へ行くと、座敷には湯のみが2つ置かれていた。

平次はそつと湯のみに触った。

「まだお茶が入れたばかりみたいやな。まだ少し温かさが残ってる」
「さつきまで、ここにいたんやな。・・・和葉ちゃんと玲祢ちゃん
は・・・」

（和葉・・・）

「見る限りでは暴れた形跡はないみたいや……」
大滝はそう言つと座敷の隣の部屋を見に行った。

次に平次は自分の部屋に向かった。

「和葉」

名前を呼んでみたが返事はなかった。

（もしかしたらて思つたけど、やっぱり……）

真つ暗な部屋に平次は明かりを点けて辺りを見回した。

荒らされた形跡も、特に無くなっている物もないようだ。

『平次』

和葉の声が聞こえたような気がした。

声の方を慌てて振り向く。

目の前には夜風に妖しく浮かぶ桜の木があった。

（今…和葉の声が聞こえたような気がしたんやけど）

平次が見つめるその先には、ただ桜の枝がユラユラと風に揺れていた。

（外…？）

しかし窓を開けて周りを見渡したが和葉の姿は何処にもなかった。

（やっぱり気のせいやったみたいやな………ん？）

桜の木の根元に何かが光って見えた。

（なんやあれ？）

部屋の窓から体を乗り出して目を細めながら、その物がなんであるかを確かめようとした。

(ここからやとよう判らんな…)

窓を閉めようて庭の方へ向かおうとしたその時、いきなり突風が平次の部屋を駆け巡った。

「うわぁ！なんやー!!」

机の上のノートや書類が風に舞った。

あっという間に部屋の床には紙が散乱して、平次は大きなため息をついた。

「メチャクチャになって…しゃーない片付けは後やな」

机の下に何かが落ちているのに気がついた。

「これはー!!」

その瞬間、平次の顔が強張った。

そして平次は自分のポケットに入っている手紙の感触を確かめた。

―― 赤い封筒 ―

あの日届いた赤い手紙は平次のポケットに入っている。

平次の心臓が一気に高鳴った。

その封筒は前の物と一緒に裏を返すと、やはり黒いシールが逆さに貼ってあった。

平次は封を開けると一枚の紙が入っていた。

『ザンネンデシタ

ハヤク

ミツケナイト

シラナイヨ』

静かな怒りの感情が湧きあがってきた。

「…許さへんで…絶対！」

和葉が連れさられたと確信した平次はその手紙を握りつぶした。

（動揺したらあかん！落ち着いて考えるんや）

自分に言い聞かせて部屋からでると、縁側の廊下から庭へと降りた。

（さっき光ってみえたのは・・・）

桜の木の根元にあったのは

「和葉に渡したペンダント…」

それは阿笠博士に作ってもらったGPSが付いていたペンダントだった。

（気づかれたんか！）

それを手に取り握り締めて、もう1つの手で拳を作り桜の幹をい切り殴った。

「くそっ！！和葉！！！！」

そんな平次を心配そうに大滝はみていた。

（平ちゃん……スマン。なんの力にもなれんで）

ある人物が頭に過ぎった。

（彼なら平ちゃんの力になってくれるかもしれん）

大滝は前事件で連絡先を覚えてもらったメモを取り出した。

そして携帯で連絡しようとした時だった。

玄関のチャイムが鳴った。

「すいません。服部君はいますか？」

玄関から声がした。

大滝は平次を残して玄関の方へ向かった。

目を疑った。

今、連絡しようとしていた人物が目の前にいた。

「工藤…新一君」

「どうも。久しぶりですね大滝警部さん」

新一は軽く会釈した。

彼の後ろには目を赤くした蘭がいた。

(3) (後書き)

新登場。

彼は昼間平次達を見送ったのだが…。

展開が早いです。

スイマセン。

忙しくて更新が遅いですが、ポチポチ投稿させていただきます。

(4)

「平ちゃんならこつちや……」

大滝は家の中に2人を招き入れた。

「あの……！」

大滝に声をかけたのは蘭だった。

「あの……和葉ちゃんは……」

大滝は蘭から目を逸らして

「ここには……おらんのや」

蘭は驚きと同時に震え始めた。

「蘭……大丈夫だ。……スイマセンおじやまします」
新一は優しく蘭の肩を抱いて家にあがった。

桜の木の下で、平次は根元を見つめていた。

「来年は見られへんかもしれんしー

この前ここで和葉が言った言葉が、平次の胸を苦しめていた。

後姿からでは分からない表情に、新一は庭に下りて平次にゆっくりと近寄った。

「なあ。工藤・・・もしも和葉に何かあったら・・・俺は自分を止められないかもしれへん」

「・・・・・・・・」

平次はゆっくりと振り返って新一を見た。

「そんな時は・・・お前が止めてくれ・・・」

2人の間に強い風が吹き抜ける。

「・・・わかった」

新一の言葉に平次がフツと笑った。

「良かった・・・自分は今まで何人もの人を刑務所に送ってきた。その・・・俺は例えどんな理由であろうとも・・・人を殺すことは出来ないんや。わかるやろ？」

新一は頷き、1つ間をおいて言った。

「じゃあ・・・俺からもいいか」

「なんや？」

「・・・和葉ちゃんを連れて必ず戻ってこい」

新一は真剣な眼差しで平次に言った。

「当たり前や。俺は自分の命に代えてでも・・・」

「お前もだ。・・・服部」

驚いたように平次は新一を見た。

死を覚悟していた平次にとって、重く心に響いた。

「ああ、約束や」

2人は静かに笑いあった。

一度、平次の部屋に皆は集まった。

最初に疑問に思っていた事を平次は新一に聞いた。

「ところでなんで大阪にきたんや？ 昼間別れたばかりやんけ」

新一は蘭の方をみて

「蘭が・・・あの時の俺たち会話を聞いていたんだ」

「ホンマか・・・姉ちゃんそんな素振り見せへんかったのに」

平次は驚いたように蘭を見た。

蘭は小さく頷いた。

「だって・・・和葉ちゃんが寝る前に妙な事を言ったから・・・なんとなく眠れなくて」

平次が眉を顰めて、蘭に聞き返した。

「妙な事って・・・和葉なんて言ってたんや？」

蘭は新一の方を見た。

新一はその瞳に頷き、そして蘭が話し始めた。

「和葉ちゃん・・・自分の身に何かあるかも知れないって。爆破があつた日に・・・刑事さんが2人和葉ちゃんを見張っていたんでしょ？それに服部君が・・・妙に優しくて、心配ばかりするって」

新一はため息をついた。

「服部・・・」

「なんやなん！俺はいつもどつりに振舞ってたで。なあ？大滝ハン」

「平ちゃん・・・俺も感づかれるかとは思ってた」

一瞬沈黙になり、皆の視線が一気に平次の方へ向けられた。

「知らんわ！俺は精一杯普通にしてたんや！」

新一は搜索するにあたり、この前のペンダントの話を切り出した。

「そう言えば服部。お前和葉ちゃんのペンダントにGPSの発信機つけていただろ？それを追えば・・・」

「アカン・・・」

そう言つてペンダントを新一に見せた。

「さつき桜の根元に落ちてたんや・・・手詰まりになってしもった」

新一は蘭の方をチラリとみて

「・・・そうでもないようだぜ。実は」

「8時間前」

東京駅

「今度服部達が会う時は、引越して来る時だな」
新一は平次達を見送った後に大きな背伸びをした。

「新一・・・あのね」

蘭が言いにくそうに新一をみた。

「ん？なんだよ」

「昨日服部君と夜遅くまで話をしてたでしょ？・・・聞くつもりはなかったの！本当よ！・・・だけど・・・和葉ちゃんの話をしてたから・・・もしかしたらって思ってた」

蘭はそう言う时下を向いてしまった。

「もしかしたら・・・って、蘭はなにか知っているのか！」

蘭は首を横に振った。

「何も知らない。だけど和葉ちゃんが言ってたの『もしも・・・アタシに何かあったら平次の事頼んでもええ？蘭ちゃんと工藤君なら平次の力になってくれると思うねん』って。私その前に和葉ちゃんから誰かに狙われているかもって聞いていたから・・・。冗談だよねって言ったら和葉ちゃんは笑って『おやすみ』って眠ってしまっただの」

蘭の瞳からは涙が溢れ始めていた。

「なんだか和葉ちゃんの笑顔が気になって・・・不安で・・・寝付けなくてそしたら書斎で」

「それで俺達の話聞いていたのか」

「ごめんなさい・・・だからお願い新一！大阪に行って和葉ちゃんを守ってあげて！」

「・・・蘭」

「だって・・・私には待つことしか出来ないから。新一なら服部君の力になってあげれるでしょ？邪魔にならないように私は・・・東京で待つてるから」

蘭は新一がもとの体に戻ってから、何処に行くにも一緒だった。

事件に行くたびに不安そうな瞳で見送る姿に、何度も心が痛んだ。

危ないと分かっているけど、現場に蘭を連れて行ってしまふ時もあった。

何も言わなくても瞳の奥が語っている。

行かないでと。

その蘭が新一に行けと言っている。

自分は何も出来ないから東京に残るといふ蘭の瞳に迷いや不安はない。

だけど1人にしておけない新一は

「じゃあ...今から行こうぜ。大阪に」

「私はいいよ。和葉ちゃんの無事な姿を見れたらそれで」

「だめだ」

新一は蘭の手を掴んで、

「蘭がいないと・・・俺がダメなんだ」

「新一・・・」

「それにさ。和葉ちゃんも蘭がいたほうが心強いと思うし・・・」

「うん！」

泣きながらも嬉しそうに蘭は頷いた。

「ところで・・・蘭に聞きたいことがあるんだけど・・・俺があげたペンダントどうしたんだ？」

「あれ・・・排水溝に・・・」

「蘭。俺に嘘が通用するとも思っているのか？」

蘭は少し考えて、仕方ないと諦めたように答えた。

「・・・あのペンダント。新一からお守りの代わりって貰ってから、何だか新一が遠くから見守ってくれているようで安心できるの」

その言葉に新一は一瞬ドキッとした。

（半分当たってる・・・）

「だから和葉ちゃんのお守りの1つに中にそっと入れておいたの。」

和葉ちゃんが早く安心して暮らせませうにって」

「えっ！」

新一は急いで携帯を開けた。

確かに蘭が傍ににいるのに発信機は徐々に遠ざかっていつている。

「ハハ・・・マジかよ」

「ごめん。勝手な事ばかりして・・・新一怒ってる？」

「いや」

（その逆だよ・・・）

そして急いで家に戻り、簡単に荷物をまとめて大阪へと向かった。

「と、言うわけだよ」

そう言うとな新一は自分の携帯を差し出した。

平次は蘭の手を握り、

「おおきに！姉ちゃんのおかげや！」

「えっ??？」

何も知らない蘭は何のことだか分からないという顔をして平次と新一の顔を交互にみた。

「服部・・・蘭から離れてくれ」

「おお！スマンスマン！」

蘭から離れて平次は新一の携帯を手に取った。

画面には光が点滅しながら動いているのが表示されていた。

これで和葉の居場所が分かるようになった。

「平ちゃん！ほんなら俺は府警に戻っておやつさん達に報告してるわ。なんかあったらいつでも連絡してくれや」

大滝は部屋を出て行こうしたその時

「この事件が終わったら、和葉ちゃんと平ちゃんと工藤ハン達とお好み焼きでも食いに行こうや・・・・・・な？」

そう言っただけで家を出て行った。

「そやな・・・みんなで揃ってお好み焼き食いに行かなな」

平次は目頭が熱くなるのを抑えて、窓の方に顔を向けた。

桜の蕾が膨らんで、今に花が咲きそうな事にこの時平次は気づいていなかった。

（４）（後書き）

いつも読んで頂いてありがとうございます！

特に言う事はありませんが……。あつ！来週の更新は未定です。出来次第させて頂きます。

そうそう、今回蘭ちゃんいい役でした。書いててかわいいなあって思いました（笑）

(5)

「・・・なるほど。その女と刑事2人が確かに怪しな」
新一は右手を顎に当てて考えていた。

平次はこの数時間で知った出来事を説明した。

坂田には恋人がいた事。

刑事2人が上の人間から怪しまれていた事。
そして2人とも現在連絡が取れない事。

「和葉が居なくなっただのが多分今から一時間以内。最後に連絡した時間を携帯で確認しても…それくらいや」
平次は自分の携帯の送信履歴を見た。

「一時間以内か。なあ服部。俺のGPSからするとそう遠くには行っていないようだ。でも移動は続けている…俺たちを欺く為なのか？」
新一も自分の携帯を見て、止まることのない発信機の光を随時確認して言った。

「大滝ハンも多分あの2人の事を追ってくれてると思うし、取り合えず和葉を助けに行かなあかん。そんなに遠くないんならバイクで追いかけ…」

「バカヤロウ！そんな無闇に追い掛け回して和葉ちゃんに何かあったらどうするんだよ。お前が助けに来るのを彼女は信じてるんだぜ

「少しは慎重に…」

「工藤…お前がもしもや！その姉ちゃんが同じ目にあっても、同じ事が言えるんか！居場所が解ってて…なんで助けに行くな言っんや！」

平次は蘭を指して新一に怒鳴った。

「そんな事を言って彼女がもし…！」

その言葉の先を新一は躊躇った。

蘭がそんな2人を悲しげな顔で

「もっ…やめてよ。私は…和葉ちゃんが無事に戻って来てくれるなら、私が替わって人質になってもいいから。だから…お願い今は争わないで！」

2人は蘭のその言葉に我に返った。

「蘭…ごめん」

「スマン…そんな意味やないんやけど」

2人は気まずそうにお互いに下を向いた。

その時新一の視界にある物が入ってきた。

（ん？あれはあの手紙…）

新一は平次のズボンの後ろのポケットに赤い手紙が入っているのに気がついた。

「なあ服部。俺が夜中に言った事覚えてるか…」

新一は赤い封筒を平次から抜き取った。

「なんやねん急に…ん？封筒が気になるって言うてた話か？」

「ああ…。で、今回お前からの話を聞いて解った事が1つあるんだ」
新一はこの前言った違和感の話と今回の平次の話を結びつけた。

「今回の事件は間違いない青乃主玲祢だ」

新一は赤い手紙を裏に返して、平次にシールの部分を見せた。

「俺はこの手紙の犯人が黒い羽根のシールを逆に貼ってある事が疑問だった。これはやっぱり何かを示していたんだ。…そう。犯人はこうやって違和感…つまり何かのメッセージを示すことで、お前に自分が犯人だと知らせていたのかも知れない」

蘭がポツリと

「それって…捕まえてくれて事なの？」

「そうかもな。自己顕示であるようにも思えるけど少し違う…玲祢

さんがもしも復讐の為にやっているのだとしたら、何故服部を待っているのだろう…。和葉ちゃんを何度も狙っているが殺さないのは復讐だけではないのかもしれない。俺は今まで復讐絡みの犯行だろうと思っていた。でも…この赤い手紙に隠された謎には自分では止められない衝動があつて、お前に止めてくれといってるように思うんだ」

新一はチラリと平次をみた。

平次は坂田の言葉を思い出していた。

（『自分ではもう止められないから、君のように全力で助けてくれる人間が必要なんや！』もしもあの言葉が関係してるとすると、坂田ハンは知つてて何も言わない振りをして俺に伝えようとしてくれてたつて事か？ちゅう事はやっぱり犯人は…」

蘭がポツリと手紙を見て呟いた。

「謎つて…黒い羽根…逆さま…つて事？」

その言葉に平次は新一の顔を見た。

何か気づいた感じの平次に新一は軽く頷いて話を進めた。

「そうなんだ。このシールの羽根は黒いだろ？蘭だったら黒い羽根から何を思い浮かべる？」

蘭は少し考えて

「そうねえ…えっと、カラス…かな？」

新一はその言葉に続けて言った。

「そうなんだ。そうやって普通は黒い羽根の生き物を考えるんだ。」

「…だけどこれは違うものを指しているんだ。そうだろう？服部」
新一は手紙をを平次に渡した。

平次は赤い手紙の裏の黒いシールを切なそうに見ながら言った。

「これは…焼かれた羽根を示してたんや」

平次は辛そうな表情で手紙を握り締めた。

(5) (後書き)

事件の謎が明らかに…なってきた(?)

まだ続くだろうこのお話(多分)

犯人は青乃主玲祢

焼けた羽根の意味とは…。

皆様が思い浮かべるのは…そうです。

あの悲しい…あれです。

ではまた出来次第と言う事で…のんびり更新をお待ち下さいませ。

(6)

「赤い封筒は太陽を示し…焼かれた羽根が逆さになってるやろ？これは多分、イカロスの翼になぞられていたんや」

蘭が不思議そうに平次に聞いた。

「イカロスって太陽に向かって羽根が溶けて海に落ちたっていう…あの…」

「そや。そのイカロスちゅうのは、ギリシア神話に登場する人物の一人なんや。王様の怒りをかけて幽閉されたんがダイダロスとイカルスの話で…。イカロスは鳥の羽根を集めて蠟で翼を作り、牢屋の窓から飛び出すんや。結局…高く飛びすぎて太陽の熱に蠟が溶けて海に落ちてしまふんやけど…。で、その飛び立った牢屋っていうんを示してるのは…拘置所の坂田ハンちゅうわけや」

新一は頷いて、今までのメッセージを思い出し言葉を続けた。

「犯人は服部へのメッセージの中に坂田さんと指す言葉を隠していたんだ。

最初のアプローチで『あの子の命はあと何日』とあったらしいが、これは命のタイムリミットを思わせていた…和葉ちゃんだけでなく坂田さんの事も指していたんだ。

そしてあのメール…。坂田さんを思い描かせるのには充分だった」

新一の言葉に悔しそうな表情を浮かべる平次。

「坂田ハンをすぐに思い浮かべなかった俺に…脅しをかけるための爆破やつたんやろか？」

そして平次は玲祢と会った時を思い出していた。

「俺と和葉は爆破事件の時に、玲祢に一度あつたんや…」

新一は玲祢の行動が掴めないかと平次に質問を試みた。

「その時の彼女の様子はどうだった？何か言ったり、おかしい事はなかったか？もしかしたら爆破も彼女の仕業じゃ…」

新一の中では爆破事件の犯人の容疑者のあの2人と玲祢のが別々の事件だとは考えられなかった。

平次は玲祢のその時の状態を覚えていた。

「俺が見たときはホンマにしんどそうで……。……。俺はあの時玲祢の脈や呼吸、顔色をしっかりとみただけ……。あんな演技では無理やで。呼吸1つとっても不規則やし浅いしやな……。自分で爆破しといてそんななるか？」

その言葉に新一は考え込んだ。

「あと言っていた事いうたら……」

平次は一点を見つめながら思い出そうとした。

そんな時、蘭が新一の服を引っ張っていい辛そうに小声で

「ねえ……。新一……。私ちよつとトイレに行ってくるね」

と恥ずかしそうに言った。

平次は一度蘭がこの家を訪れているのを忘れていて

「ああ……。トイレの場所分らんやろ？」

そう言っただけで案内しようと立ち上がろうとした。

蘭はそんな平次を止めるように

「いいよ。前に一度来てるから大丈夫。それよりも和葉ちゃんの為に……ね」

「……さやか？」

そんな平次に蘭は少し微笑んで

「うん。ありがとう。じゃあちよつとトイレに……」

蘭は足早に部屋を出て行った。

平次は蘭の言葉に思い出しかけた。

（なんや……いま……少し思い出しそうやった。……あゝなんや今の感覚……ありがとう……そや……！）

「工藤思い出したで！あん時玲祢は

『うちの事はかまわんで行って下さい。そのうち助けも来ると思いますが、ほんまにありがとう』確かにそう言いよった。あと『そばにおってくれてありがとう』とも言われたんや」

新一は閃いたように

「服部……その『そのうち助けに来る』って言葉は救急隊じゃなくて、誰かが助けに来る予定だったって事じゃないか？」

平次と新一は顔を見合わせた。

その時、平次の携帯に電話が入った。

『おお！平ちゃんか？あんな今いろんな奴にあの2人の事を聞いて

分かった事なんやけど…町井は昔、東京で万引きやら恐喝やら派手にやってたらしいわ。その現場でたまたま東京の方へ合同捜査に上の者と一緒に行っていた坂田に街で注意された事があつたらしいで。ほんでそれを機に町井は坂田をからかい半分でよう会いに来るようになったらしいわ…そんな中で町井が誤認逮捕された時があつてな。坂田は自分の事件とは別に一生懸命内緒で証拠を集めてたらしいで。なんや…警視庁の高木ちゅう奴と探してたらしいわ。そんで町井は恩ができた事があつてかあいつは大阪府警に入らって決めたらしいで」

大滝は町井の過去で分かったことを簡単に伝えた。

「どう思う工藤？」

平次の問いかけに新一は少し考えた。

「…そうだな。警察に対して誤認逮捕で恨みを持っているの爆破か…でもいまいち納得できないな。それに…お前を恨む動機には結びつかないんじゃないか？」

平次は頷いて大滝の話の続きを聞いた。

「大滝ハン。もう1人の…」

『それや…平ちゃん。先に青乃主玲祢の事を話させてくれ…。あの子が坂田と知り合ったのは5年前の豊中の事件…。大富豪の一家が惨殺された事件があつてな。その生き残りが当時17歳だった玲祢ちゃんやった。坂田はその事件の担当刑事でな。坂田も親を悲しい亡くし方してたから彼女を放っておけなかったんやろな。その後2人を見かけた事があつたんやけど…なんや幸せそうやった事をよう覚えてるわ』

大滝から聞かされた坂田と玲祢の過去は、平次の思っていたものよりも強い2人の結びつきを感じた。

『それと平ちゃん澤田の事や。あいつの父親は元府議会議員の郷田宗太郎の秘書を短い間やってた事があつたんや！』

「なんやて！それほんまか！」

平次は郷田宗太郎殺害を止めに入つた事を思い出し驚いた。

（あの時…坂田ハンは郷田を殺そうとしていたんやつた）

そんな平次にさらに大滝は話を進めた。

『ほんでな…ある日を境に澤田の父親の行方が分からんようになってしまったんや…それが5年前。それも…青乃主家で殺人事件がある2日前からや。…これは偶然やと思うか平ちゃん？』

平次も新一も受話器越しに何かが見えてきた。

『そんで…沼淵。毛利さん達と山小屋で捕まえた郷田の仲間がな…何件か殺人をしてたんやけど…その中には青乃主家の名前もあつたんや。あの事件は複数犯での犯行やつたのは当時の防犯カメラで確認出来ていたんやけど…それには映っていない犯人が2人いたんや。澤田の父親と沼淵はそのまま逃亡した』

新一は平次の顔を見た。

「澤田は郷田と関係があつて」

平次は納得するように答えた。

「郷田は俺と関係してくる訳や」

『澤田の父親は今だ行方不明やけど…郷田に殺られた可能性が高い。平ちゃんもしかすると今回の犯人は』

「ああ…澤田の可能性が高いな。ほんで玲祢も一枚かんでる。2人は共犯者や」

新一は今までの話から動機を考えた。

「お前を恨む理由は…澤田は多分、坂田さんが郷田を殺そうとしてたのを知っていたんだ。そしてそれを望んでいた。しかし…お前が止めに入った事で郷田は殺されずに済んだ。そして郷田は刑務所に入って生きている。恨みの矛先が…服部お前に向かったんだ。そう…大事の人が殺される事をお前に知らしめる為に…和葉ちゃんを誘拐したんだ」

平次は新一の言葉に頷いた。

そして自分の手に持っていた携帯の発信機に気がついた。

「発信機が動いていない…。和葉はここにいるんや」

(6) (後書き)

さてさて…。

ややこしくなってきましたよ…。

文章を足したり減らしたりの作業で時間が過ぎてしまいました…。(もうこんな時間!!)

そして…いつもよりやや多い文字…。

少し(?) わからない部分があると思います。

「すべて戯言」を読んでいたければ多少は繋がってくるのではないかと思います。でもあれは暗いお話だし…。ヒマヒマどうしようもなくヒ・マ!という人は読んでみて下さいな。かなり今回の話と重なると思いますので。

次回はまた来週の月曜日に…。

(7)

潮の匂いがする場所に車は止まった。

「騒がずに黙ったまま降りるんや。玲祢：開けてやり」

和葉は後ろに手を軽く縛られており、自分では開けることは出来なかった。

澤田は後部席のドアのロックを解いた。

和葉は澤田を睨みながら、静かに車から降りた。
それに続くように玲祢も下を向いたまま降りてきた。

車から降りてきた澤田に和葉が詰め寄った。

「なんでこんな事するん？何が目的なん」

「俺は黙って言うたやろ…うるさい女は嫌いや」

澤田は和葉の顎に手を当てて、

「そんなに睨むと可愛い顔が台無しやで。恨むんやったら自分の彼氏を恨むんやな。ほら、早うこの姉ちゃんを倉庫に連れて行けや！」
少し苛立つように声を荒げた。

玲祢は和葉を優しく押して

「こっちに来て…」

和葉の後ろに立ってゆっくりと歩いた。

目の前には大きな倉庫があり、入り口からは真っ暗な闇が覗いていた。

中の様子は全く分からなかった。

入り口前までいくと玲祢は左手を伸ばして、和葉の背を突き飛ばすと同時に叫んだ。

「和葉ちゃん…お願い逃げて!!」
そう言つて倉庫に入る瞬間、入り口とは違う方へ逃がそうとした。

一瞬、和葉は状況が分からなかったが、押された方へと思い切り走り始めた。

「アホが!!!!」
澤田は持つていた銃を急いで抜いて、和葉に向けて発砲した。

和葉は脰^{うで}の辺りに鈍い痛みを感じて倒れこんだ。
痛みを感じたところに手を当てると、微かな出血と火傷のような痛みがあった。

和葉はそつと傷をみると、軽くかすり傷を負った程度の怪我だった。

澤田はゆっくりと和葉に近づいて
「逃げるに痛い目に合うで……こんな風に」

そう言つて今度は玲祢に向かって弾を撃った。

その弾は玲祢の左手に命中した。
玲祢が痛みを堪えて、地面にうずくまった。

「俺、射撃メツチャ上手やろ?今さっきもアンタの足をワザと外して撃ったんや。狙った所やったらどこでも命中すんで…今度はアイツの右手でも狙おうか?」

そう言つて和葉に笑いかけたあと、玲祢の方にゆつくりと構えた。

「玲祢さん!!」

和葉はうずくまっている玲祢に向かって叫んだが、玲祢は痛みの為動けないようだ。

真つ青な顔の和葉に

「アンタが逃げるなら、今ここで玲祢を殺してもええんやで」

そつと和葉の耳元で囁いた。

「…アタシは逃げへん。お願い!玲祢さんを撃たんといて!!」

和葉は必死な顔で澤田に訴えた。

澤田の笑顔のまま

「…冗談やつて!ホンマにアンタはええ子やなあ。大丈夫や。大人しくしててくれたら何もせいへんから…まあ…時間までやけどな」
ククツと喉で笑い和葉の肩を引き寄せた。

「…玲祢。今度こんなマネしたらこの子…時間前に殺すから覚えとけや」

「アカン…和葉ちゃんを離して!」

懇願するように澤田にしがみついたが、その手を思い切り振り切られ再び地面に倒れた。

「玲祢さん!」

和葉は澤田に引っ張られ倉庫の中に入つていった。

玲祢は撃たれた手を必死で押さえながら、2人の後を追うようにふらつきながら中へと消えていった。

その様子を伺っていた男がいた。

構えた銃をゆっくりと下げた。

そして車の中へ戻って、携帯の電源を入れた。

「町井です。大滝警部ですか？…ちよつと約束があつて勝手な事してすいません。…澤田ですか？…アイツは…僕の目の前にいます…。現在、澤田は銃を使つて発砲し、2名負傷しています。…そうです。一名は軽症のようですが、もう一名は左手に弾が命中し流血しています。場所は大阪湾の…」

町井が大滝に連絡を入れている時、遠くからバイクのマフラー音がした。

「大滝警部…平次君がきました」

そしてバイクが町井の車の正面に止まった。

町井は携帯の電源を切つて車から降りた。

平次はバイクのエンジンをかけたまま降りて、白いメットを脱いだ。

「町井ハン… どういう事が説明してもらおか」
睨むように町井に聞いた。

困ったようにタバコをおもむろに取り出し吸い始めた。

そして町井は車に寄りかかって平次に聞いた。

「平次君はどこまで知ってるんですか？」

「アンタが東京で坂田ハンに誤認逮捕された時、助けてもらった事。そして坂田ハンを追って大阪府警に入った事くらいや」

タバコの白い煙をフーと、まるでため息のように吐き出された。

「さすが… 服部平次君ですね。… 分かりました。取り合えず… あの倉庫に和葉さんはいます。軽く怪我したみたいだけど、今のところは無事です」

町井の指した方向に倉庫があり、その前にはセダン型の車が横付けされていた。

（和葉！）

平次は本当は今にも走って助けに行きたかった。だが拳を握り気持ちを抑えて、町井の話の続きを聞いた。

「僕は坂田さんに何度も面会に行っていました。そこで坂田さんに頼まれたんです。玲祢さんの事を頼みたいと…。ある人物が坂田さんの死刑の日を玲祢さんに告げた。それに気がついた坂田さんが心配し僕を頼ってくれました。何も恩を返してない僕は玲祢さんを守

ると坂田さんに約束しました。」

「…澤田がその人物なんやな」

「…そうです。澤田は僕の知らない所で着々と準備をしていました。最終目的は平次君…君です。その君をおびき出す為に玲祢さんを利用しようした。澤田は坂田さんを想う玲祢さんの気持ちを言葉巧みに操り…君に近づいたんだ」

町井は倉庫の方へ視線を向け、悲しげに見つめた。

(7) (後書き)

すべて戯言の最後に繋がったかな？

ではでは出来次第また更新させて頂きます！

「澤田が携帯の電源を切っていたのは分かるんやけど、なんでアンタまで電源切ってたんや？」

平次は1つの疑問を町井に投げた。

「…数時間前に澤田が僕に府警に戻れと連絡があったと言ってきたんです。勿論、嘘だとは分かっていました。でもその嘘に乗らないと澤田は僕に不快感を抱くと思い、その場で別れる事にしたんです。その時…に澤田が僕に言ったんです「後で連絡するから」と。

多分…アリバイを作る為じゃないかと思いました。僕は別れた後、澤田の行動を見張っていました。澤田は自分が1人になったのを確認すると服部家の庭の方へ回りました。

そして和葉さんと玲祢さん呼び出し、澤田に何か言われると玲祢さんは和葉さんを無理やり引っ張っていき車に押し込みました。その時、澤田から携帯に連絡が入ってきました。和葉さんが騒いでいる声と澤田の声…。澤田はまるで目の前で事件があるかのように僕にこう言った」

顔を上げて平次を見た。

「和葉さんが捕まった。奴らを追う…」と

平次はそこまで話を聞くと、片方の拳をギュツと握った。

坂田に会いに行く時に和葉を連れて行かなかったのは、よくよく考

えての事だった。

自分の母親も和葉の傍に居るのだからと安心してた事や、坂田の会う自分の姿を見られなくなかった事。そしてなによりも和葉が心配させる事になるのが平次はどうしても嫌だったのだ。

「ゴメンな平次君。僕は犯罪を止めさせる事よりも、捕まえる事を優先してしまった。その結果こんな事になってしまった…」

「いや…。町井ハンのせいやない。全部…俺のせいなんや」

（そうや。どんな時でもそばにおらなアカンかったんや）

平次は悔やんでも悔やみきれない気持ちに押しつぶされそうだった。

そんな平次に町井はワザと話を逸らすように

「ところで…平次君は何でこの場所が分かったんです？僕は誰にも連絡してないし、ましてや澤田は大阪市内で一旦パトカーを捨てて何度も違う車に乗り換えたりと目を眩ませようとしていた。僕だって必死に追跡したのに…」

町井は不思議そうに平次をみた。

「ちょー待ってくれ。その前に…町井ハンの話をまとめさせてな。

つまりや…澤田は町井ハんに連絡入れるからと携帯の電源を入れさせておいて、和葉を使った自作自演のアリバイ工作をしたんやな」

町井は頷くと

「僕は3人の後を気づかれないように追跡しました。その途中で、府警から連絡で「事件があったから至急戻ってこい」という連絡があったんです。でも、僕が澤田を見失ってしまったら居場所が分か

らなくなってしまう…。警察は辞める覚悟で携帯の電源を切り、澤田を追う事にしました」

平次は町井の言葉に納得した。

そして徐に胸のポケットから携帯を取り出して、和葉の現在地を告げる光をみせた。

「…俺はこれで和葉を追ってきたんや。多分…町井ハンが澤田が怪しいと思うてる頃に東京の知人に作ってもらったもんや。…いうても別物なんやけどな」

ハハッと平次は苦笑いをした。

「さすが…。坂田さんの言っていた通り、君はスゴイ子ですね」

「なんやそのスゴイって。なんもスゴイ事あらへん。坂田ハンは何て俺の事言って…」

パァーーーーーーン!!!!!!!!!!

その時銃声が辺りに響き、2人はハッと倉庫の方をみた。

(8) (後書き)

さて…今週はきえない翼を何話か立て続けに投稿させて頂きます。
その代わり来週からしばらくは急がしのでちよっとお休みなんぞ…。

まあ…こんな作者ですけど宜しくお願いします。

(9)

「お願い…離れて…和葉ちゃんから」

玲祢が震える手で銃を持ったまま、澤田を睨みながらそう言った。

和葉の目の前で、澤田が撃たれた。

その撃たれた弾は、澤田の頬をかすめた。

「玲祢さん！」

「玲祢…お前なんで…」

澤田は和葉から離れると、地面に唾を吐いてゆっくりと玲祢に歩み寄った。

和葉は澤田が離れた瞬間、身を丸め震えた。

「私が…死んでも和葉ちゃんに指一本触れさせへん。大丈夫やから…和葉ちゃん」

玲祢は和葉に微笑んで、澤田に警戒しつつ一步一步和葉に近づいていった。

玲祢の銃を持つ手が震えているのに、和葉は気がついた。

（アタシの為に…撃ってくれたんや）

和葉は痛む脹脛に耐えながら、玲祢の元へ行こうと動いた。

「アカン！和葉ちゃん！」

澤田が和葉の方へ銃を構えた。

玲祢は和葉の前へ立ちはだかり、銃を澤田に向けた。

「何のマネや？…お前の望み通りに事は運んだやる。感謝される筋合いはあっても、邪魔される筋合いは無いんとちゃうか？」
澤田は玲祢の額に銃口をあてた。

「誰も傷つける事が無い計画やって言うてたのに…和葉ちゃんに何しようとしたん？アンタ…最低の人間や！」

目の前の澤田を睨みつけながら、玲祢は言葉を返した。

怯える和葉を澤田はチラリとみて

「……邪魔が入って興味が反れてしもうたわ。せつかくあのクソガキの顔が思い切り歪むとこ見れる思ってたのに」
そう言い残し、澤田はその場から離れていった。

「玲祢さん！！」

破られたシャツの袖を握りしめ、和葉は玲祢の左手の傷口にそれを当てた。

銃の先から滴り落ちる血が止まらなかった。

「その傷…さっきアタシを逃がそうとしてくれた時の」
自分を守ってくれる玲祢に感謝するも、自分のせいで怪我をさせてしまった事に強い自責の念を感じた。

「心配せんでも…まだ…澤田は私を殺さないから」

「玲祢さん！そやけど血が仰山でて…！」

玲祢はそつと和葉の手を握った。

「和葉ちゃんに馱で助けてもらうたやろ？そやから…今度はあたしに助けさせてお願い。和葉ちゃんを彼に返さないと…」

和葉を大事そうに抱きしめた。

「私…平次君が彼を追いつめたとき、初めて心の底から人を憎んだ。そんな私を裕ちゃんは彼の事だから同じように苦しんでいるかもしれへんて。会いに来てくれたら…思い残すことないって…」
玲祢の頬に涙が流れる。

「玲祢さん…」

「だけど彼は一度も裕ちゃんの前には姿を現さなかった…。それでも拘置所に私が会いに行くたびに平次君がこれまで解いてきた事件の話を嬉しそうに話してくれた。自分の事よりも平次君のことばかり…」

「……………」

「死刑が決まった事知ったのはあなた達が卒業する3日前やった。私が裕ちゃんの面会に行った帰りに、澤田に声をかけられたのは…そして私に近づいてきて、平次君がどうやったら裕ちゃんに自分から会いに行ってくれるように仕向けるかを考えてくれた。……………
…平次君が裕ちゃんに会いに来てくれた時点でこの事件は終わり

のはずだった………それなのに！」

玲祢は涙を流しながら和葉を強く抱きしめた。

「ごめんなさい……こんな事になってしまって。大切な……裕ちゃんが大切やと言ってた2人を危ない目に合わせてしまった！」

和葉は何も言わず玲祢の肩を擦ってあげた。

玲祢は涙を流し許しを乞いながら、止まらない出血が意識が朦朧きうろうとさせ、そのまま目を閉じた。

窓から見える月を和葉は見上げた。

（平次……アタシは信じてる。信じて待ってるから……アタシ達を早う迎えに来て）

和葉は握られたままの玲祢の手を強く握った。

辺りに鳴り響いた銃声に、平次は急いでバイクに戻った。

町井は加えていたタバコを落として

「えっ…。む…無茶だ！1人で乗り込むなんて無謀すぎる！」
焦りながら平次を止めようとした。

そんな町井の制止を無視し平次はバイクに跨り、バイクのマフラーを吹かした始めた。

「平次君！澤田は銃を持っているんだ！警察が来るまで行っちゃダメだ！」

町井が平次に叫んだ。

しかし平次はメットを被ったまま、ニヤツと笑ってバイクをリターンさせて徐々に加速を付けた。

そして倉庫の正面とは真逆に走り始めたのだ。

「…無茶だ！！」

町井は平次が正面の入り口からではなく、ここから見える縦長の窓を壊して入ろうとしている事に気がついた。

急いで平次のバイクの進行方向に走って両手を広げ、目を瞑って必死で止めようとした。

メットの中から見える町井のその表情に、平次は嬉しさがこみ上げてきた。

「町井ハンも熱い人やなあ。最近、そこまで自分の仕事を捨ててまで犯人を追ったり、無茶苦茶な俺みたいにな奴を止めようとする奴も少なくなっただちゅうのに……。まあ、そんな刑事があるほうが大阪は安泰ちゅうもんや。そやけどな町井ハン……。そこはどいてもらうで！アイツが待つてるさかいな！！」

平次はアクセルを全開にした。

「平次君！！」

「ウオオオオ！！！！！！！！」

バイクは高く空へと舞い上がった。

そして弧を描き、和葉のいる倉庫へ吸い寄せられるかのように窓の方へと走っていった。

ガラスが砕け散る中へ、平次は飛び込んでいった。

その様子に町井は腰を抜かして地面に座り込んだ。

「信じなれない…本当に坂田さんの言つてたとおり無茶苦茶な子だ…ハハ」

町井は呆れながらも、思わず笑いがこみ上げてきてしまった。

「はあ…必死になって僕もたいがい馬鹿だよな」

平次の姿が消えたこの静かな場所に、町井はそのまま地面に寝転んだ。

そして空を見上げて、さっきの様子を思い出した。

（…平次君がバイクでジャンプした時、マフラーの煙がまるで平次君の背中から羽根が生えて空を飛んでいるようだった。月の影に隠れて…まるで黒い翼のような）

そう思いながら、再びタバコに火をつけた。

「フウ…」。取り合えず僕に出来る事を」

携帯を取り出し

「あつ、大滝警部ですか？町井です。はい…はい…スイマセン。それで今…平次君が倉庫に突入しましたので、早く応援をお願いします」

町井は携帯をきつた後、倉庫の方をジッと見つめた。

そして今までの事を改めて振り返り、

「澤田…僕はお前が犯人だって本当は信じたくなかった。でも…これが現実なんだよな」

高い空を見つめていると、遠くからパトカーの音が聞こえてきて町

井はタバコを消した。

(1 1)

勢いよく割れた窓から平次がバイクごと飛び込んで、滑るように着地した。

「イタタタ………ん？」

「へ…平次！」

平次は暗闇の中で、目を凝らしながら声のする方へと振り向いた。

割れた窓から月明かりが伸びて、驚いている和葉の顔を照らしていた。

「なんちゅう顔しとんねん。せつかく迎えにきたんやさかい、もつとええ顔せいや」

「アホ！誰も迎えに来てなんて頼んでへんもん」

嬉しさを隠しながら言い返してるが、少し怯えてる和葉に何かがあった事を平次は感じた。

和葉の破られたシャツや、足の傷。

眉を顰めて

「和葉…そのシャツ誰にやられたんや」
静かな低い声で和葉に聞いた。

「…澤田って男にやられてん。そやけど玲祢さんが助けてくれて…
アタシは無事やったけど…その代わりに玲祢さんが撃たれて…」
和葉の傍に玲祢は横たわっていた。

平次はそつと玲祢の脈をとった。

「……大丈夫や。脈もしっかり取れるし。でも手からの出血がひどいな」

「アタシのせいや…アタシの」

小さく震える和葉に、平次は自分が着ていた上着を肩にかけてやった。

「お前のせいちゃう…俺がモタモタしてたからや。もっと手紙が届いた時に、早く気がついていれば」

「…そんな事今更言うても遅いとちやいます？服部平次君」
暗闇の中から銃を構えて、澤田が姿を現した。

「そうやな…。もう起こってしもつた事や…それにしても何でこんな手の込んだ事を…恨むなら俺に直接仕掛けてきたらええんとちやうんか？」

平次は和葉を後ろに隠して、澤田の方を睨みつけた。

「自分の大切な人を殺されな…同じ苦しみは与えられんやろ？玲祢は坂田をアンタに奪われて恨んでたんや。それにちよつと協力してやっただけや」

澤田の言葉に、平次は玲祢の方を見た。

傷だらけの体が痛々しいく、平次は胸が苦しくなり目を細めた。

和葉は平次の背中の中のシャツをギュツと掴んで、

「平次聞いて！玲祢さんは確かに最初は平次の事恨んでたけど、坂田ハンが平次に会いたがっている事知ってしまつてん。平次の事を恨んでない事がわかつて玲祢さんの気持ちも変化していったんや。死刑の日が決まつた事を澤田に知らされて、玲祢さんは坂田ハンの願いを叶えようとしたんやけど…そやけど坂田ハンに平次にはその事は言うなつて言われててん。」

死期が迫っていた坂田ハンに玲祢さんは、早く平次を会わせただけなんや！平次を自分から坂田ハンに会うように仕向けたかった…それだけやつてん！」

和葉は一生懸命に玲祢の思いを言葉にした。

その言葉を聞いていた澤田は卑下するように笑い、

「綺麗事言うて…。お前らが仲良く歩いている姿を羨ましそうに見てたんを祢はなあ…お前らが仲良く歩いている姿を羨ましそうに見てたんを俺は知ってるんや。恨んでないなんて事ある訳あらへん。幸せそうなお前らに…地獄のような日々を送ってきた俺らの一体何が分かるんや！知つたような口開くんじゃねえ！」

澤田は感情に任せて引き金を引いた。

「こつちや!!」

平次は和葉の腕を思いきり引っ張り、物置の影に飛び込んだ。

「大丈夫か和葉？」

「うん。アタシは平気…これ、外されへんかなあ」

和葉は後ろに結ばれているロープをみせた。

平次はナイフを取り出して、そのロープを切った。

「あ…ありがとう…。平次なんでそんな物騒なもん持ってるん？」

「アホ！敵陣に乗り込むのに丸腰で来るかボケ！」

そして和葉の顔を覗き込むようにして

「…ええか和葉。俺は今から澤田のところに行くから、和葉はここで大人しゅう待ってるんや」

「い…いやや！アタシも行く。平次一人で危ない目に合わせられへんもん！」

目に涙を溜めて、和葉は平次にしがみついた。

平次はその手を優しく握りしめると、自分からゆっくりと離れた。

「…俺の一生の頼みや。動くんやないで」

平次はそう言うと言物影から飛び出した。

(11) (後書き)

はい。

今回、この小説初の4日連続の投稿となりましたが、いかがでしたでしょうか。

進んでは戻って…となかなか前に進まないこの話。

それでもやっとなんとか2人を会わせるまでいきました（良かったあ）

今週はここまで…。

月曜の後書きにもあるように来週は忙しいのでお休みします（時間が出来れば更新したいと思います）

こんな話を書いていた私の事を…どうかどうか忘れないで下さいね。

平次は近くに転がっていたバイクのメットを抱えて、和葉に投げた。

「和葉！このメットを暫く被ってるんや！」

「えっ？なん…」

「ええから、はよせい！」

和葉は言われるままにメットをスッポリと被った。

「ええ子や…そのまま動かんとそこにいとくんやで」

平次は和葉が頷いた事を確認すると、右手を軽く腰にあててゆっくりと左へと歩き始めた。

澤田が平次の動きを目で追う。

「下手に動くと…撃つで」

再び銃を構えた。

平次はその声にピタツと足を止めて、そしてフツと笑った。

「そんなん怖がってたら、守りたい物は何1つ守られへん。自分の正義も信念も…大事な女も」

そして平次は右脇に隠しておいた銃を引き抜いた。

「何！」

澤田は後ろに後ずさった。

平次は澤田に向かって銃を構えて

「これで少しは対等に戦えるんちゃうか？」

真っ直ぐに伸びた右腕の先にいる澤田を睨んだ。

「俺は覚悟なら何ぼでも出来てるで…どれも命より大切な物やからな」

一歩ずつ歩み寄る。

（こいつ…俺と一緒に死んでもあの女を守るつもりなんか）

澤田の額から冷や汗が流れた。

「そやけど…自首する言っんやったら…」

平次の瞳の奥にある揺ぎ無い心に澤田は戸惑った。

だが、平次の気迫に押されつつも澤田は目の前の敵を睨みつけた。

「自首したところで何になんねん…俺の罪ってなんや？あのこを誘拐したことか？爆破の事か？俺達の人生を狂わせたお前が…なんで何も罪を被らず、平気でこれからも生きていけんねん…」

それやったら…俺が罪を被って生きていく前に…英雄と褒め称えられて誰からも裁かれないお前を…俺がお前を裁いたるわ！！」

澤田が銃を発砲した。

一発の銃声が倉庫中に鳴り響いた。

平次は左に滑り込むように近くの鉄の柱に隠れた。

「…交渉する余地は無いみたいやな。そんで言うとかけど…1つ間違ってる事があるで」

澤田の足音が近くで止まった。

「俺は犯人やその人に関わる人から恨まれる事くらい、探偵をやると決めた時から覚悟は出来ていたんや。犯人のせいで人生を狂わされた被害者と、俺のせいで人生が狂ってしまった人たちの為にも、この命がある限り犯罪を止めていくと決めたんや。…そんな思いで毎日暮らしているんや、平気なわけないやろ？そやけど…」

平次は和葉の方をチラリとみた。

メットの中和葉の心配そうな瞳が平次を見つめている。

「…いや。アンタには分からん事や」

澤田の方を再びみて

「…俺を恨んで生きてきたならこれからもそうしたらええ。感謝されたいなんてびた一文も思っへん。お前の分もまた…俺は一生罪を被って生きていくんやからな」

「その苦しみを倍にして返すのが…俺の夢やった」

澤田は近くにあった玲祢の銃を奪うと、和葉と平次の両方へ銃を向けた。

「最初に…お前に贈ったメッセージは玲祢に書かせたものやった。ああでも書いたらお前がすぐに飛びつくと思っただんやけど…あんまり本気にされんかったみたいやから、俺は手っ取り早くお前の女を手に入れようとしたんや。…そんでお前の苦しむ顔をみながらゲームを進めようと思った。そやけど…玲祢がお前たちと話してみたいと言いだめたんや」

平次の眉がピクツと動いた。

「玲祢をいいようにまるめ込んでな…改札口でお前の女が1人になった所を、玲祢に紙袋を持たせて近くのゴミ箱に捨てさせに行かせたんや。その時に話せるなら話したらええ言うてな…でも案の定、アイツは話掛けんと袋だけ捨ててきよった」

澤田は面白そうに話を進めた。

「アイツに何度も『話しかけたらお互い辛くなるだけや。坂田さんも望んでないんやろ』て言うて聞かせてたからな。アホみたいに優しいから、アイツには絶対できへんと思ってた。そんでな、アイツはその持たせた紙袋の中に小型の爆弾が入っている事も知らなかったから、爆破した時の…あの顔。あの悲惨な状況を見て玲祢は昔の事を思い出しショックに似た精神的ストレスに陥っただんや。…俺は人ごみに紛れて立ち尽くしていたお前の女の背中を押して玲祢の所へ押しやった」

澤田は和葉の方をみて、可笑しそうに笑った。

「お前の女もアホやなあ…。放って置けばええのに。心配そうに玲祢に話しかけて、ずっとそばに居てやってたわ。…ちゅっても予定通りやけどな」

「アイツはそういう女や…困ってる人を平気で見捨てたり出来る奴やない」

平次の目が徐々に鋭さを増していく。

「そんで、あの時お前らが離れて行った後に俺は玲祢に近づいてこ
う言ったんや。

『さっきの紙袋が爆破した…お前はもう立派な犯罪者やな』

その言葉を聞いてから玲祢は坂田の面会にもまるつきり行かんよう
になって…ずっと俺の傍にいたんや。そして俺達は約束をし…お前
をここまで来させる事が出来たちゅう訳や」

澤田は意気揚々と話した。

平次は倒れている玲祢をチラッと見て唇を噛んだ。

「あの人がどれだけ坂田ハンの事を想うてたか知った上で…最悪や。
お前は人の心をなんやと思うとんねん!!」

澤田は顔色を変えずに

「すべては自分の恨み晴らす為の…駒や」
そう言い切った。

「さて…おしゃべりはここまでや。じゃあ、あの女を先に殺してから…おい！お前メットを取るんや。言うこと聞かなこの男を先に撃つで」

その言葉に和葉がゆっくりとメットを取った。

「愛の力ほど、利用価値のあるものはないなあ…」
和葉の方の引き金をゆっくりと引いていく。

「和葉！！！！」

平次の声が倉庫に響く。

その時、倉庫の入り口が開いた。
「そこまでや！澤田！！」

大滝や町井を先頭とする警察が集まっていた。

(1 2) (後書き)

読んで頂いてありがとうございます。

明日も更新出来たら、これでこの3章はおわりです。

ラストまで、もうちょっと！

また頑張って書きたいと思います。

平次が突入した窓からも、拳銃を構えている警察が澤田を狙っていた。

「澤田！動くんやないぞ！そのまま銃を下に置くんや！！」

「クッ…」

澤田は和葉に向けていた方の銃をゆつくりと床に置いた。

「よし。もう一丁の方もや！」

大滝の声に緊張感が走る。

澤田はチラリと玲祢の方をみた。

意識が朦朧としながらもその瞳は澤田を捉えていた。

「時間みたいや。玲祢…約束やけど…ええんやな？」

澤田のその問いに玲祢が頷いた。

「…守ってくれるん？」

今度は澤田が頷いた。

「約束？」

平次が眉をしかめて2人をみた。

澤田は平次に向けていた銃を、玲祢へと向けて…発砲した。

そしてそれは玲祢の左胸を貫いた。

和葉の頬に返り血が付いた。

「…嘘や…」

「見るな！見たらアカン和葉！！」

「いや！いややああ！！」

和葉の叫ぶ声が倉庫に響く。

その声を背に澤田は玲祢の方は振り返らず、刑事たちのもとへと歩いた。

「上手く事が運べば犯人は玲祢やった…ちゅーはずやってんけどな。しゃーないなあ…俺が全部やったんや。なんや…簡単にすべてが潰されてしもつたな」
いつものようにククツと喉で笑った。

そして平次と距離をとったまま横に並ぶと足を止めた。

「あゝあ。この空気に耐えられへんわ…。辛気臭いって思わへんか？」

そう言つと自分の左の米神に、降ろしていた銃を突きつけた。

「こないなつたらおしまいや」

『こないなつたらもう終いです…』

平次の目には澤田と坂田がダブって見えた。

「ア…アホ！！簡単に終りにすんな！！！」

平次は自分の銃を捨てて、澤田に飛びかかった。

平次は澤田の左腕を絞めて動かないようにした。

澤田はもがきながら平次から離れようとした。

「アホ！暴れたら危ないやろ！！」

「放っておいてくれ！俺はこれ以上恨みながらは生きていたくないんや！」

「そやったら、ちゃんと罪を償って生きていけや！」

「生きていけば…またお前を恨んでしまうんやぞ！ええんかそれで
！！」

澤田が持っていた銃から四方へと数発鳴り響く中、

その一発が平次の肩を貫いた。

平次がゆっくりと後ろへ飛ばされ・・・そのまま床に倒れこんだ。

「平次！！！！」

「平ちゃん！」

大滝は銃の事を忘れて、無我夢中で澤田を押さえ込んだ。

澤田の手から銃が離れた。

町井は急いで大滝の後を追ひ、押さえられた澤田の体を確認した。

「銃や凶器はもうありません！」

近くにあつた銃を滑らせて他の警官に渡すと、町井は大滝に叫んだ。

「大滝警部！ここはいいですから早く平次くんを！！」

町井は自分の手錠を澤田にはめた。

「町井：お前：いつから俺が怪しい思つてたんや？」

澤田は町井を睨みながら聞いた。

「玲祢さんに近づいた時から…。俺は坂田さんに東京である事件で世話になった1人なんだ。それから坂田さんが刑務所に入つてからも時々面会に行つてたのさ。玲祢さんの事を頼まれて人知れず彼女を見守つていた…澤田、お前が玲祢さんに近づいていたのも知つていた。……ただ…同期のお前を疑いたくなかつたんだ。だから様子を伺つて…親友だと思つていたから…」

それだけ言つと、町井の唇を噛み締めた。

「俺は…お前の事を友達やなんて一度も思つた事は…なかつたわ」
下を向いたまま澤田は歩き出した。

町井もその後を黙つて歩き、パトカーと一緒に乗り込もうとした時
「大丈夫やるか…」

澤田が足を止めポツリと呟いた。

「平次君か？…銃を持っているお前の所へ飛んでいく位の度胸の持

ち主だ。そうそう死んだりしないさ」

町井は澤田の背中を軽く叩くと、一緒に車に乗り込んだ。

「平ちゃん大丈夫か！」

大滝は平次に駆け寄った。

「…こんな大した傷ちゃうわ。それより」

平次は痛む肩を押さえながら和葉のもとへゆっくりと向かった。

「和葉…」

「平次………平次！平次！！！」

和葉は平次の胸の中で泣き叫んだ。

怖かった訳ではない。

平次が助けに来ることを信じていたのだから。

しかし

和葉を守る為に傷ついた玲祢。

「平次！！玲祢さんがあ！！」

平次は和葉を抱きしめていない手で、そつと玲祢の顔に触れた。

ゆつくりと玲祢が口を開く…。

「裕ちゃん…アタシの方が先に行つて…待つててあげるから。もう…寂しくないように…」

玲祢の声に和葉が振り返った。

「玲祢さん！アタシや！和葉や！しっかりして！！」

「和葉…ちゃん？ゴメンな…そしてありがとう…アタシの事で泣いたらアカンで…アタシは裕ちゃんとこれから…デートやねん…いつもの公園で……そんで和葉ちゃんとも笑顔で…一緒に笑って…もつと話もいっぱいしたかつ…」

「アカン！玲祢さん！目を開けて」

差し出された玲祢の手を和葉がギュツと握った。

「平次君と…和葉ちゃんに……ホンマに…あり…が…」

玲祢が静かに微笑んで…息を引き取った。

玲祢の最後を見守ると、

平次は和葉を強く抱きしめた。

和葉は平次の胸の中で声を殺して泣いた。

『アタシの事で泣いたらアカンで』

玲祢の言葉を守ろうと必死に堪えていた。

それでも和葉の瞳からは涙が止まることはなかった。

(13) (後書き)

では…今週中にもう一話更新したいと思います。

倉庫の外では2人を心配して待っている新一と蘭の姿があった。

一緒にきた遠山刑事部長から、大体の事はここまでの車中で状況を知らされていた。

「…2人とも無事だよな？」

蘭が新一の手を掴んで尋ねた。

「さつき連絡があつたから、そろそろだと…」

新一は倉庫の入り口の方をみて、平次たちが出てくるのを待った。

救急隊や大滝の心配をよそに、平次が和葉と共に倉庫から出てきた。

「あんまり無茶せんで担架に乗りいやって。なあ平ちゃん。オヤジさんに怒られてしまうわ」

「そんな大した怪我やないから大丈夫やって…俺な、どうしても言わな気が済まへん奴があるんや」

平次は肩を押さえたまま、辺りをキョロキョロと見回した。

「平次…肩…」

和葉も心配そうに平次を見上げた。

「…後でちゃんと診てもらうさかい…まあ、心配いらんわ。見てみい、さつきとあんまり血の量が変わってないやろ？」

止血した包帯に血液が広がってない事を、手を外して和葉に見せた。和葉の安堵した表情を見て

「なっ？俺は東京のどつかの探偵と違って日頃から体を鍛えてんねん。あつ…そや！アイツどこや！絶対来てるはず」

再び平次は周りを見始めた。

「平次？」

遠くにいた蘭が和葉の姿を見つけて、手を大きく振った。

「和葉ちゃん！！」

その声の方向に和葉は顔を向けて驚き、口に手をあてたまま止まった。

「嘘や……玲祢…さん？」

「ちやうで和葉。…あれは玲祢やない。お前の友達の『蘭ちゃん』や。お前の事を心配してわざわざ東京から来てくれて……どないしたんや和葉？」

和葉の瞳が曇った事に、平次はすべてを知った上で聞いた。

「そつやんな…玲祢さんは…もう」

和葉は泣きそうな自分をかろうじて止めた。

そんな和葉の頭の上に平次の大きな手が乗った。

「平次？」

「我慢すんや…。泣きたかった泣いたらええねんって。そして…ちゃんと前を向いていくんや。そうせな…あの人の死が無駄になるやろ？俺達はあの人への罪を一つ一つ償っていかなアカンねん」
そう言つて静かに和葉の頭を自分の胸に寄せた。

和葉はその言葉に、瞳に溜まった涙を袖で拭った。

「…平次はこんな思いを何度もしてたんやな…。アタシだけ分かった振りして、お姉さん気取つて…」

「…俺の事はどうでもええねんで。…ほれ！ちゃんとねえちゃんにありがとう言つてきいや」

平次は和葉から離れて頭に乗せていた手を背中に回し、軽く前へと押し出した。

2、3歩前に出て和葉はその場で立ち止まり、ゆっくりと後ろを振り返り平次をみた。

「…ありがとう平次！」

平次は振り返ったその笑顔に頷いた。

後ろで見ていた大滝はその2人の姿に微笑んで、平次には何も言わず遠山刑事のもとへと歩いて行った。

和葉は足を庇いながら一生懸命歩いて蘭に近いた。
蘭も駆け寄りお互いの手を握り締め合った。

（玲祢さんの手と一緒にや…優しくて温かい）

「和葉ちゃん…どうかしたの？」

玲祢の事を思い出した和葉に、蘭は心配そうに顔を覗き込んだ。
和葉は大きく首を振って

「ハハ…何でもないねん。それより蘭ちゃん！アタシの事心配して来てくれたんやってな。ホンマにありがとう！！」

「ううん。私のことより…和葉ちゃん大丈夫？足…痛いよね？」

辛そうな表情で、和葉の足をみつめた。

「ん…まあ、こんなんすぐに治るから大丈夫やって。蘭ちゃんがそんな顔してたら、アタシが工藤君に怒られてしまうわ…そやからお願い…蘭ちゃん笑ってくれる？アタシ…今メツチャ蘭ちゃんの写真がみたい気分やねん」

元気に振る舞う和葉に、蘭は頷いた。

「…わかった。笑ってみる」

すると蘭が百面相並みに頑張って笑顔を作ろうとした。

「プツ…アハハ！蘭ちゃん面白すぎるわ！」

「ひど〜い！…もう！！」

蘭は頬を膨らましてそっぽを向いたが、和葉の笑顔につられていつの間にか笑っていた。

楽しそうに笑い合う彼女達を、違う場所から優しい眼差しでみていた彼等がゆつくりと歩み寄る。

「よう…工藤！」

陽気なようで、空明るい声で平次が話しかけてきた。

「無事だったんだな」

新一は分かっている、何も知らない表情で平次を迎えた。

いきなり新一の襟元を掴んで平次がにじり寄った。

「ああ！？何が『無事だったんだな』や！誰が弾の入ってないモデルガン貸せ言うたんや？何が危ないからコレ持っていけや？俺は死に掛けたんやぞ！！」

「ナイフは役にたっただろ？だいたい銃なんて日本じゃ法律違反だぜ？」

「はあ？そんならナイフかて同じやろが。はあ…すると何かい。もし俺や和葉が殺されてもええいう思いで渡したんか？」

「…んな訳ねーだろ。俺はお前を信じてた。そして…お前には人を撃たせたくなかった。それだけだよ」

「工藤…お前」

新一は平次に軽く微笑んだかと思うと、急に険しい表情で歩き始めた。

「工藤？何処へ行くん…」

「誰だアイツ！蘭に話しかけてる男は！

…ったくよ。油断も隙もねえ。

おゝい蘭！和葉ちゃん！病院まではこっちのパトカーで送っていくってさ！」

蘭と和葉は顔を見合わせて

「和葉ちゃん…私の肩に掴まって」

「ありがとう。ほんならお言葉に甘えて」

お互い笑いあうと和葉の歩調に合わせながら、新一達のもとへと歩いてきた。

「もう！そんな大声で呼ばなくても…」

「工藤くん…もしかしてヤキモチやったりして」

「ハハ…服部が肩が痛いって言うから、早く病院に行こうかと思っ
てさ」

新一は平次の負傷している肩を叩いた。

「イタッ！何すん…」

新一は顔を近付けて

「そつだよな？服部…」
と凄んだ。

「ああ、そ…や」

「平次はすぐにカッコつけるさかい…やっぱり工藤くんは優しいし男前やね！蘭ちゃんが羨しいわあ」

「そんな事…。それよりダメだよ服部くん！我慢は体に毒だからね！痛いなら早く処置してもらわなきゃ」

「はいはい。スンマセン」

平次は大きな溜め息を吐いて、下を向いたまま歩き出した。

その背中に新一はフツと笑って

「服部！俺達やつぱり今から帰るからさ！…東京で待ってるぜ」
そう言つと背を向け、蘭の手を引っ張り歩きだした。

「…さよか？まあ…そんな時は和葉連れてまた寄るさかい。ほら行くで和葉！」

そして平次は和葉に手を差し延べた。

「えっ！ちよつと新一！えつと…和葉ちゃん東京で待ってるからね」
「待ってや平次…蘭ちゃん、また東京でな」

それぞれが歩き出す道を、

青白い月明かりが細く照らして

長い一日の終わりが静かに告げられた。

(14) (後書き)

では来週は大阪の方へ行く為、更新がいつになるか分かりません。
本場の大阪弁を堪能してきたいと思います (笑)

最終章へ散らばった黒き羽根はそれぞれの心の中で揺れて

次の日。

お昼前に和葉が平次の見舞いにやってきた。

平次はベッドの上で病人らしく横たわり、大人しく本を読んでいた。ここ数日間の疲れのせいか、バイク雑誌を読んでいる途中にウトウトしていたところだった。

「平次…まだ痛むん？」

そつと部屋を開けて、和葉が静かに入ってきた。

そしていつもの場所に座り、平次の顔を覗き込んだ。

平次は顔の上にあったバイク雑誌をそのままにし、わざと反応を示さなかった。

（何言っても心配するくせに…このまま寝たふりしとこ）

和葉は平次が寝ていると思い、近くにあったテレビのリモコンを押した。

そして平次に遠慮してボリュームを下げると何をする訳でもなく、

ただ無気力に画面をみていた。

静かな部屋にTVの音だけが響いていた。

TVではお笑い番組をやっているものの、和葉の笑い声が全く聞こえてこない。

そんな和葉の様子を寝た振りをしながら、かける言葉を探す平次。

どれくらい時間がたっただろうか。

和葉がいきなり持っていたTVのリモコンを床に落した。

「へ……いじ……」

和葉の喉を絞るような声に、平次は上体を起こした。

和葉の震える瞳の先には TVのニュース速報が映っていた。

そこには

坂田の死刑執行を告げるテロップが静かに流れていた。

（坂田ハン…）

平次の脳裏には何故か優しい坂田の笑顔が鮮やかに蘇ってきた。

（もしも…昨日会えへんかったら、きっと笑顔なんて思い出されへんかったやろな…そやけど）

2度目のテロップが音もなく流れた。

「…さすがにキツいな。でも…きちんと受け入れな」
そして下を向いて気がついた。

自分のその手に重なるもう一つの優しい温もり。

「一緒に真実をみさせてな… 1人では辛い事かて、平次がそこで生きてくれてて… アタシが傍で支えられたら」

和葉の優しいその言葉に胸が救われる思いだった。

「そやな…」

握られた手をそのままに、和葉をグイッと引き寄せた。

次の瞬間。

再び部屋の扉が開いた。

「平ちゃん！怪我の具合はどうや？町井連れて見舞いに来たで！」

「……なんかお邪魔のようですよ。出直した方が…」

和葉は2人の出現に体中赤くなり、思わず平次を突き飛ばした。

「い…いややわあ！そんなんちゃうから！ホンマやで。気にせんといてな！あつ…そやった。おばちゃんとお昼の準備手伝う約束やったんや。ほんなら大滝ハンも町井ハンもごゆっくり」

あつけに取られている2人の合間をスルリと抜けて、和葉がその場から去って行った。

部屋には突き飛ばされた平次が壁に寄りかかったまま下を向いていた。

「だ…大丈夫か平ちゃん」

「スイマセン…平次君」

申し訳なさそうな2人に平次は苦笑いで、「まあ…入りいや」と部屋へと招き入れた。

(2)

先に口を開いたのは大滝だった。

「結局、オヤツサン達共話し合った結果…玲祢ちゃんの事は坂田には言っていないや。ほんとで今から俺らが坂田の身柄を引き取りに行くところや。アイツの亡骸と玲祢ちゃんのお骨を一緒に海に撒きに行こうかと思うてな…親族の人も殺人者と一緒に墓には入れたくない言うてなあ…説得してみたが全く耳を貸してくれへんのや。死んでも孤独なんてアイツが気の毒すぎてなあ…。そしたら、なんや町井が知っている所あるらしくてなあ」
大滝は町井の方を見て頷いた。

「坂田さんが獄中で話してくれた中で、玲祢さんとデートに行った場所を聞いていた事を覚えて…。調べてみたらそこで海葬やつてくれるらしいんです。結局…こんな事でしか何も恩返しは出来ないけれど…僕は坂田さんがどんな形であっても、幸せであってくれればいいと思つて…玲祢さんも…」
町井はやるせない表情で俯いた。

その表情に大滝は

「玲祢ちゃんが生きて幸せに暮らしていく事が…坂田の最後の望みやったからな。坂田が捕まって直ぐに玲祢ちゃんに会いに行つていたら『今』は変わっていたんやないかって思つたら…悔やまれて仕方ないわ」

そう言つと両手を膝の上で硬く握った。

「それを言つなら…僕がもっと早く坂田さんに会いにいき、玲祢さんの事も澤田の事もしつかりと止めに入つていたら…」

大滝と町井はそれぞれの後悔の念にかられていた。

平次はそんな2人から少し離れて窓辺に立った。

「そやな。死ななあかん幸せの形なんてのはやっぱり納得は出来へん…けど」

「けど？」

「今は笑って…2人で仲良うおるんやろな」

風が窓から吹き込んで、平次の前髪を揺らした。

「笑うとる…か。平ちゃんにはそう見えるんか？」

大滝は平次に尋ねた。

平次は首を横に振った。

「ただの願いなんかもしれへんけど…」

その平次の言葉に大滝が立ち上がった。

「そやな…ここで後悔しても仕方ないし、今は2人の為に出来る事をしてやらなな。初めて2人に会ったあの時の…公園で会った2人の笑顔が俺にも浮かんできた気がしたわ…おおきにな平ちゃん。町井！はよ行くで！」

「はい！じゃあ…平次君。海葬する時は是非参列して下さい。…誰よりも2人は平次君や和葉さんに感謝してると…僕はそう思います」

「ああ。必ず和葉と一緒にに行かせてもらっわ」

横顔からは分からないが平次が泣いているような気がして、2人は切ない気持ちで平次を見つめた。

「ほんなら…平ちゃん。また連絡させるさかい」
その言葉に平次は軽く手を上げた。

窓の外を見たまま振り返らない平次に、2人は顔を見合わせるとそつと部屋を後にした。

（2）（後書き）

短いですが…いろいろあって投稿させて頂きました。

あと何話で終わるかは分かりませんが、目前なのは確か…かな？

最後の2話辺りから感想欄を開き、最終話アップさせて3日位で閉じたいと思います。

感想もらったものには返事を一応書いているので見て頂けたらと思います。

（もも様メインとなっていますが…（笑））

では…また更新時（多分来週かな？）まで…。

(3)

平次と和葉が東京へ旅立つ2日前に海葬は行われた。

静かな海へと撒かれる遺灰を眺めて、ここに来た誰もが2人の冥福をが祈った。

遠く海を眺めている平次のもとへ、大滝がそつと歩み寄って大事そうに白い封筒を差し出した。

「平ちゃん…これな…坂田が玲祢ちゃんに宛てた最後に書いた手紙や。刑務官の人から預かつたんやけど」

「俺が…読んでもええんか？」

平次は少し躊躇ったが、大滝は平次の目を見つめ頷いた。

平次が白い封筒を受け取ると、大滝は黙ってその場から去って行った。

その様子をみていた和葉は気を使って

「ほんなら…アタシも向こうで待ってるわ」と平次のもとを去ろうとした。

平次は離れようとした和葉の腕を掴んで

「支えてくれるんやろ？」

そう言って、手を離して近くのベンチに座った。

和葉は黙って平次の後に着いて行き横へと座った。

そして平次は手紙を開いた。

―玲祢へ―

もう…きっと会うことはない。

いや、会えないから君に手紙を書いた。

そつ…最後の願いを叶えて欲しいんや。

平次君に会いに行つて欲しい。

平次君が今日僕に会いに来てくれた。

ホンマに嬉かった…死ぬ前に会えて良かったと心から思うんや。

そやから…伝えて欲しい。

平次君の信念や正義は、最後の時まで心に持ち続けるつもりや…と。

存在がこの世からなくなってもこの心だけは消えないと信じて止まないんだと。

平次君がこれからの人生で悩んで見失いそうになった時、僕は平次君の肩を押してその思いをいつでも思い出させてやると。

頑張つて欲しい…と、平次君に願うことを伝えに行つて欲しいんや。

そして…玲祢

照れて言えたためしがないけど

愛している。

永遠の愛やと思う。

人を愛する事は自分にとって辛い事やと知った上で君を愛した。

だけど…君でよかったと思う。

誰よりも幸せになって欲しいと心から願う。

そやから自分で命を絶つよう事は絶対にしないでくれ。

それだけ言いたかったんや。

勝手な事ばかり言つてゴメンな。

そして…ありがとう

坂田裕介
I

平次は手紙を何度も読み返した。

そして和葉の手を握って立ち上がり、そのまま何も言わず歩き出した。

「平次、どこに行くん？」

黙ったまま歩き続ける平次に、心配そうな顔で着いて行つた。

しばらく歩くと町井が棧橋の方にて、タバコを吹かしながら海を眺めていた。

「おつた…町井ハンちよつと借りたいものがあんねんけど」

平次の声に町井が振り向いた。

「なんですか？」

「ライター貸して欲しいんや」

「いいですけど…何に使うんですか？」

町井はポケットからライターを取り出し、平次の手の平へと渡した。

「まあ、ちよつとな。後で返すさかい…いや…町井ハンも一緒に来てもらうたほうがええんかもな」

「僕も…ですか？」

不思議そうな顔で平次の後について行った。

「おつ…丁度、大滝ハンもおるなあ」

浜辺で海を見ている大滝に平次達が近づいていった。

平次達の気配に気づき大滝が立ち上がった。

「平ちゃん…読んだんか？」

「ああ。しっかりと読ませてもらうたで」
笑顔で白い封筒を見せた。

そして平次は次に自分が持ってきた赤い封筒を出した。

「平ちゃん…それ」

「ああ…すべてはこれから始まったんや」

そしてすべての封筒を束にすると、ライターの火を近づけた。

「平次！なにしてるん」

「平ちゃん！」

「平次君！」

そして封筒は赤く燃えてユラユラと空へ舞い、黒い紙となって海へと落ちていった。

「前に…工藤が今回の事はイカロスになぞられたモノや言うてた。実際のところはわからへんけど…イカロスはすべて分かった上で太陽に近づいたんやないかって俺は思うんや。自分の死と引き換えにしても叶えたい思いやったんやないかって。叶えたいその思い…それが『欲』やったのか『希望』やったんかはわからへんけど…な」

平次は海に浮かぶ灰になった手紙を見つめてそう言った。

平次の言葉はそれぞれの心に消える事ない思いを残し、黒く焼かれた手紙の破片はまるで海に堕ちたイカロスの翼のごとく波に揺られて海に漂っていた。

そして手紙は海の緩やかなうねりと共に沖へと流されて行き、やがて見えなくなってしまうても平次達はその場から離れようとはしなかった。

(3) (後書き)

一応……ここで終わりになります(＾|＾;))

あとはエピソードを残すのみとなりました。

と、言う訳で今から感想欄を開かせて頂きます。閉じてから感想・評価を下さった方にサラッと見ていただけたらと思います。

今回のこのきえない翼は自分で冒険を試みた作品で、良くも悪くも評価にあたいする作品ではないと反省を踏まえた上で、また感想・評価欄は永遠に閉じさせて頂きます。

閉じているにも関わらず励ましのコメントやメッセージを頂いた皆様には本当に感謝 ありがとうございます！

明日か明後日には更新をして……終わりにしたいと思います！

では……またお会いいたしましょう(＾O＾) /

エピソード

東京へ旅立つ朝が訪れた。

雲一つない青空。

優しい光が服部家を照らしていた。

旅立つ準備も終えて、2人は玄関で静華に見送られていた。

「最後の最後で色々あったけど、2人ともあっちに行つてからもしっかりと頑張ってくるんよ」

「うん！オバチャンも体には気いつけてなあ」

和葉のこの笑顔が暫く見れない事が、静華にとって残念で仕方なかった。

「和葉ちゃん…ウチのアホ息子を飽きんと面倒みたつてな」

和葉にお願いしたあと、平次の方をチラリと見た。

平次は2人の会話を横に、黙って靴紐を結んでいた。

一瞬、静華と目が合い微笑まれた時、東京には絶対来んでくれ…と心底思った。

そんな平次に静華は優しい眼差しで

「平次も…向こうに行ったら工藤ハンや毛利ハンの所にちゃんと挨拶に行かなあかんで。アンター1人やとまだまだ危なつかしゅうて…それと、ちゃんとお土産渡すんやで」
大きな紙袋を2つ平次に持たせた。

「…面倒やなあ」

（ちゅーか俺は工藤より下やと遠まわしに言いよって…ホンマこのオバハン）

ふてくされた顔でお土産の袋を受け取った。

「ええやん。向こうに着いたらすぐに工藤君達に会いに行くつもりやし」

「じゃあ、安心やね。やつぱり和葉ちゃんがそばにおらなアカンなあ…。なあ、平次？」

「…しょーもない」

平次は大きなスポーツバックを肩に背負った。

話が尽きることない女2人を置いて、平次は先に玄関を出て外の光を浴びた。

晴れ渡る空を見上げて、思わず大きく背伸びをした。

「んゝ気持ちええ朝やな！…そやけど、何で女ちゅうのはこうも話が好きなんや」

呆れたように振り返った。

まだ笑い声が聞こえており、仕方ないという気持ちでもう少し待つ事

にした。

何気なく辺りを見回していると

「ん？……もしかしてあれ」

目に飛び込んできたものに、平次は急いで玄関の中へと戻った。

平次がいきなり和葉の手を掴んで外へと引っ張った。

「和葉！……ええから来い！」

「なんなん？」

庭の方へと周り、桜の木の真下でピタリと止まった。

「見てみ」

そして平次は空の方へと指を差した。

見上げた先に和葉は思わず両手を口にあてて

「……嘘やん」

そう呟いた。

「間に合ったみたいやな」

平次は木の幹に手を当てて、眩しそうに上を見上げた。

事件が起きる前にはまだ咲きそうにない桜の木に、今年は見ること
は無理だと諦めていた2人。

「和葉…きつとこの木は今日の日を待ってたんや」

和葉は舞い散る桜の花びらを手のひらですくった。

「…なんか嬉しい…まるでここにいない皆に見送られてるようで」
薄っすらと瞳に涙を溜めて、その花びらを大事そうに両手で包んだ。

「そろそろ時間や…和葉」

名残惜しむようにその場から離れようとしないうちに和葉に平次がポツリ
と呟いた。

「来年2人でまた見に来るって約束したやろ？」

「…そやったね。ほんなら…約束守ってな？」

目が合った和葉に平次は笑顔で頷いた。

あまり見せない優しい笑顔に和葉の頬が赤く染まる。

「行くで和葉！」

「うん！」

「「行つてきます」」

平次と和葉は大きく手を振って、新たな一步を踏み出したのだった。

エピローグ（後書き）

はい！という訳でありがとうございました！

最後はやっぱり笑顔で終わりたいだったので、このようなエピソードになりました（笑）

…これ以上ややこしくしたら大変ですしね（^| ^;）

ここまで読んで頂いた皆様には本当に感謝しています！いろいろ言いたい事もあるでしょうに…反省も多々しております（;|;）
長い駄文をつらつら…とよく書いたなと振り返り呆れていると同時に達成感に似た何かもあり、寂しい気もします。

では…ここでお別れです。

私も精進して頑張りますo（^ - ^）o

前にも言いましたが、評価・感想欄は数日で閉じさせていただきます。
宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4201b/>

きえない翼

2010年10月9日17時46分発行